ISSN 0289-3835

奈 良 保 育 学 院

# 研 究 紀 要

第 22 号

保育基礎ゼミ及び保育専門ゼミにおける保育実践力の向上を目指して
― 系列３園とのよりよい連携の在り方 ― …… 増井　啓子・阪本さゆり　1

領域「人間関係」に関する「基本的な生活習慣」についての国会質問答弁の研究
…… 今井　慶宗　31

乳幼児期における新しい時代の運動会に向けた今後の課題
― N市等の現状を踏まえて ― …… 杉本　睦洸・森　むつみ・山村　康子　43

２０２４

# 保育基礎ゼミ及び保育専門ゼミにおける
# 保育実践力の向上を目指して
# ― 系列３園とのよりよい連携の在り方 ―

Basic Childcare Seminars and Specialized Childcare Seminars enabling learners to Acquire Practical Skills
~ How to improve cooperation with affiliated Kindergartens ~

増　井　啓　子　・　阪　本　さゆり
Keiko MASUI & Sayuri SAKAMOTO

**要旨**

奈良保育学院では、令和５年度よりカリキュラム化された保育基礎ゼミ・専門ゼミを通して、学生の保育実践力の向上を目指して取り組んでいる。令和６年度は、ゼミの活動に協力している法人内の３園との連携をより充実させるためにコーディネーターを置き、学生にとっても３園にとっても効果的な内容となることを目指してきた。その連携の在り方を振り返りながら、学生の保育実践力がどのように向上しているかを明らかにするとともに、それを支える環境として、３園とのより良い連携の在り方を追究する。

**キーワード**：保育観察　幼児理解　ドキュメンテーション　連携　コーディネート

## はじめに

奈良保育学院では、令和５年度より保育専門職課程における学生の保育実践力の向上を目的として、保育基礎ゼミ及び保育専門ゼミという講座を設けて取り組んでいる。

２年間の履修課程の中に位置付けられた保育実習及び教育実習以外に、保育ゼミという年間を通した保育現場での学びの機会があることによって、学生たちの保育を見つめる眼は確実に向上し、一人一人が手ごたえを感じ取れるようになってきている。その背景には、学校法人白藤学園の傘下に存在する付属幼稚園・おおみや保育園・おおみやこども園の協力が存在し、連携・協力のための関係性構築を目指してきたことが、学生の資質・能力の向上に繋がっていると言える。

そこで、今年度は、まず３園との連携を円滑に行うためのコーディネーターを置き、学生の保育実践力向上の充実を図ることにした。そして、昨年度の取組から明らかになった３つの課題、①教育課程に位置付けられた授業時間の効果的な活用　②学生が得た各園での学びの状況把握、及びそれを実践力向上につなぐための指導法の改善・充実　③保育専門ゼミにおけるドキュメンテーションの作成とその効果を明らかにすることの解決に向けて取り組むことを目指したい。また、この取組を本学の強みとするための改善・充実を図っていこうと考えている。

## Ⅰ　保育基礎ゼミと保育専門ゼミの目的と令和６年度の取組の重点

### 1　保育基礎ゼミと保育専門ゼミの目的

#### ①　保育ゼミを通して、学生にどのような力を身に付けさせるのか

幼児教育は、幼児の望ましい発達を期待して幼児のもつ潜在的な可能性に働き掛け、その人格形成を図ることを目指している。そのため、保育者は幼児期にふさわしい生活を準備し、その中で生まれる遊びや生活の中で様々なことを体験させることを通して、人と関わる力や思考力、感性や表現力等を育み、人間として社会と関わり、人として生きていくための基礎を培うことが求められる。また、幼児期にふさわしい生活を通して、幼児は身近な環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって主体的に環境に関わりながら様々な活動を展開し、感動体験を重ねていく。このような環境を通して行われる保育・教育の中で、幼児の発達が促されていくと言える。そのため、保育者には、幼児が遊びに没頭し充実感が味わえるような環境を準備することが求められる。また、その環境の中で、幼児と適切な関わり（援助や言葉がけ）を行う役割も存在する。

保育者を目指す学生は、このような保育者の役割を理解して、自分にできることや自分が成さねばならないことを判断し行動に移すことができるよう、知識理解とともに保育技術を身に付けることが求められる。また、幼児の思いや願いを読み取り受け止めることのできる感性や幼児理解力を身に付けなければならない。さらに、同僚や保護者との信頼関係を築き、幼児のために連携・協力を心掛けることも大切である。

保育者には、以上述べたような資質・能力を身に付ける手段としての豊かなコミュニケーション力も必要である。保育現場に毎週行かせていただき、保育観察記録を取りながら「保育を見る眼」を育み、人と関わる力・思考力・豊かな感性と表現力・コミュニケーション力・幼児理解力などの資質・能力を培うことを目指していきたい。

#### ②　保育を観察し記録することの意義

子どもの健やかな成長を支える専門職としての保育者の役割を理解するためには、学生自身が実感をもって保育者の役割に気付くことが必要である。学生たちに「なぜ保育者になろうと思ったのか」を問うと、「子どもが好きだから」「子どもがかわいいから」という答えが返ってくることが多い。保育者の役割に気付き、保育者としての責任感や使命感を感じるためには、保育現場で実際にどのように保育が行われているのかを知り、当事者として自分がどのような姿に成長していくことが求められるのかについて、気付き考えることからスタートしなくてはならないと考える。つまり、学生の意識を高めるためにも、まず保育を観察し記録することによって、様々な気付きや学びを得ることの意義は大きいといえる。

また、「書くこと」に対して苦手意識をもつ学生が多いという実態もある。保育実習や教育実習を経験する中で、実習記録簿の作成に時間がかかったり、何をどのように書くとよいのかという基本的なことが十分理解できなかったりして苦労する姿が存在する。

このような実態からも、観察実習を日常的に行い限られた時間の中で記録をまとめ、省察することを積み重ねていくことが必要である。そして、保育者の役割を理解し幼児を理解す

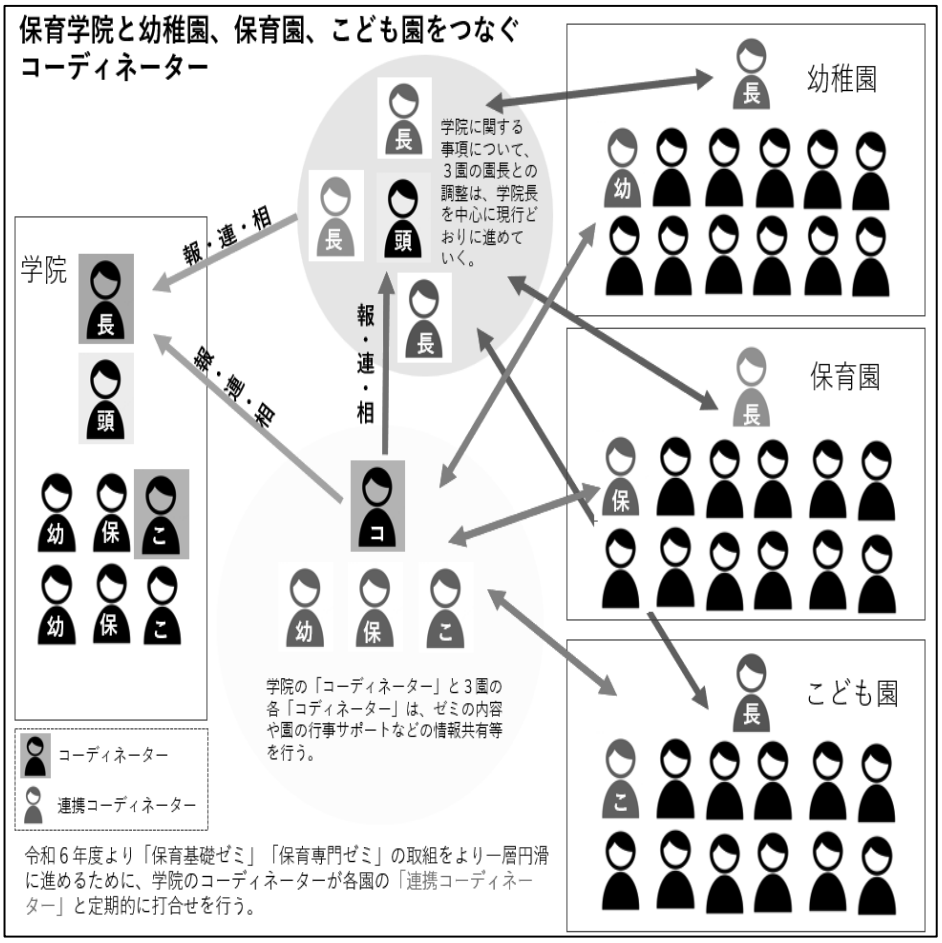
ることの大切さに気付くことこそが、専門性の向上に繋がると考えている。また、一定の期間を観察実習として位置づけることもできるが、年間を通しての関わりの中でこそ得られる様々な場面での経験は、就職後にも役立つ経験となると思われる。

## 2　今年度（令和６年度）の取組の重点

### ①　保育学院と３園をつなぐコーディネーターの設置

令和５年度の反省を踏まえて、今年度は、保育ゼミの充実と協力園とのより良い連携・協力体制の構築を目指して、コーディネーターを置くことになった。

令和５年度よりスタートした保育基礎ゼミと保育専門ゼミは、学院の６人の教員が２名ずつ３園に分かれて学生と共に各園に出向き指導している。初年度の取組の中では、「学院の教員間の情報共有不足」や「３園との連絡調整不足」「学生への指導内容や指導方法のばらつき」等の課題が残った。そこで、これらの課題を解決する方法として、コーディネーターを置き、保育ゼミの内容や方法と３園の保育計画との調整、園からの要請や要望への対応、学院と３園との情報共有等を行うこととした。（下記のイメージ図参照）



≪コーディネーターの役割≫

○保育ゼミでは、観察実習（保育の観察・記録）を基本とし、協力園の要請に応じて環境実習や保育補助等にも取り組み、体験的な学びが得られるようにする。

○保育ゼミ３グループでの指導内容や進捗状況の把握と調整、情報共有等を行い、保育ゼミでの学びが、効率よく効果的に積み重ねられるよう調整する。

○学生の学びの姿を適切に評価できるよう、評価規準を設定し教員間での周知と共有をはかる。

○学院と３園との計画のすり合わせ・活動の打ち合わせを行う。

・連携・協力の関係性がよりよい形に発展できるよう調整する。

・限られた時間をより充実したものにするための計画実施（報告会や発表会の計画・実施等）。

○園からの要請や要望への対応として、学生への周知と調整を実施する。

・園行事等への支援（引率補助等）

・アルバイトやボランティアの募集等

② 令和６年度の保育ゼミの計画

今年度のゼミの計画は、下表のようになっている。１回生は保育基礎ゼミを月曜日に、２回生は保育専門ゼミを毎週火曜日に、３園に分かれて実施する。１回生は観察実習で取った記録をもとに、観察記録をまとめる。２回生は写真の記録をもとにしてドキュメンテーションの作成を行う。

**2024 年度前期保育ゼミ予定**

保育基礎ゼミ　１回生

| | 月 日 | 1限 | 2限 |
|---|---|---|---|
| ① | 4月 8日 | | 基礎ゼミの趣旨と概要<br>幼児教育機関３園の違い |
| ② | 4月 15日 | | 保育記録の意義<br>保育を見る視点と記録の取り方 |
| ③ | 4月 22日 | | フォトランゲージ |
| ④ | 5月 13日 | 保育観察 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑤ | 5月 20日 | 保育観察 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑥ | 5月 27日 | 保育観察 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑦ | 6月 3日 | 保育観察 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑧ | 6月 10日 | 保育観察 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑨ | 6月 17日 | 保育観察 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑩ | 6月 24日 | 保育観察 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑪ | 7月 1日 | 保育観察 | 前期の振り返りとまとめ |
| ⑫ | 7月 16日（火）4限：各園での学びの報告と振り返り | | |

＊ １回生の保育実習：7月 22日～8月 2日

保育基礎ゼミでは保育観察記録を取ることを中心にして、環境実習や保育補助等を各園との打ち合わせの中で、随時行う。

保育専門ゼミ　２回生

| | 月 日 | 1限 | 2限 |
|---|---|---|---|
| ① | 4月 16日 | | 履修カルテの確認<br>専門ゼミの趣旨と概要 |
| ② | 4月 23日 | | 保育を見る視点と記録の取り方・写真の活用 |
| ③ | 4月 30日 | | ドキュメンテーションの作成について |
| ④ | 5月 7日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーションの作成と振り返り |
| ⑤ | 5月 21日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーションの作成と振り返り |
| ⑥ | 5月 28日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーションの作成と振り返り |
| ⑦ | 5月 21日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーションの作成と振り返り |
| ⑧ | 5月 28日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーションの作成と振り返り |
| ⑨ | 6月 4日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーションの作成と振り返り |
| ⑩ | 6月 11日 | 花いっぱいプロジェクト | ドキュメンテーションの作成 |
| ⑪ | 7月 9日 | 保育観察・保育補助 | 前期の振り返りとまとめ |
| ⑫ | 7月 24日（水）4限：各園での学びと振り返り | | |

＊ ２回生の教育実習：6月 17日～6月 28日

保育専門ゼミでは、保育観察を行いながら保育補助を行うとともに写真による記録を残し、ドキュメンテーションの作成を行う。

## 2024年度 後期保育ゼミ予定表

**保育基礎ゼミ（1回生）**

| | 月日 | 1限 | 2限 |
|---|---|---|---|
| | 9月9日 | | |
| | 9月16日 | 敬老の日（振替休日） | |
| | 9月23日 | 秋分の日 | |
| ① | 9月30日 | 保育観察・保育補助 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ② | 10月7日 | 保育観察・保育補助 | 観察記録のまとめと振り返り |
| | 10月14日 | スポーツの日 | |
| | 10月21日 | | |
| ③ | 10月28日 | 保育観察・保育補助 | 観察記録のまとめと振り返り |
| | 11月4日 | 文化の日（振替休日） | |
| ④ | 11月11日 | 花いっぱいプロジェクト<br>保育観察・保育補助 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑤ | 11月18日 | 保育観察・保育補助 | 観察記録のまとめと振り返り |
| ⑥ | 11月25日 | 保育観察・保育補助 | 観察記録のまとめと振り返り |
| | 12月2日 | 教育実習 | |
| | 12月9日 | | |
| | 12月16日 | | |
| | 1月13日 | 成人の日 | |
| ⑦ | 1月20日 | （3園に分かれて）1年間の学びの振り返りと報告テーマの決定 | |
| ⑧ | 1月27日 | （3限）報告原稿作成 | （4限）報告練習 |
| ⑨ | 1月31日 | （3・4限）1年間の学びの報告会　於：学院内教室 | |

**保育専門ゼミ（2回生）**

| | 月日 | 1限 | 2限 |
|---|---|---|---|
| ① | 9月10日 | | 後期専門ゼミの計画 |
| ② | 9月17日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ③ | 9月24日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ④ | 10月1日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑤ | 10月8日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑥ | 10月15日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑦ | 10月22日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑧ | 10月29日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑨ | 11月5日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑩ | 11月12日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑪ | 11月19日 | 保育観察・保育補助 | ドキュメンテーション作成と振り返り |
| ⑫ | 11月26日 | 後期振り返り | 小論文のテーマ決定 |
| ⑬ | 12月3日 | 小論文と発表プレゼンテーションの作成 | |
| ⑭ | 12月10日 | 小論文と発表プレゼンテーションの作成 | |
| ⑮ | 12月17日 | 小論文と発表プレゼンテーションの作成 | |
| ⑯ | 1月14日 | 1・2限：発表会準備とリハーサル | 3・4限：論文発表会<br>於 やわらぎホール |

③　保育ゼミの時間配分と内容

基礎ゼミでは、授業計画に、実際の保育観察までにガイダンスと準備期間（４月８日～４月28日）を設定して、観察記録をどのように作成するとよいのか意識づけと指導を行った上で､自分なりの目標を立てて取り組ませるようにした｡園側の行事や保育計画との調整をコーディネーターが行い、園外保育や遠足等の行事にも引率補助や運営補助として柔軟に協力・対応できるようにしている。

| １限目（8:50～10:20）　　２限目（10:30～12:00） | |
|---|---|
| 8:50～ 9:10 | ・学院でその日のゼミの事前指導を行う。<br>各園に出向いて保育体験を始める前に「保育を見る視点」（子どもの姿・子どもの生活や遊び・保育者の関わり・環境）やその日の保育体験におけるねらいを明確化する。<br>・健康チェックを行い、各園に行く。 |
| 9:20～10:50 | ・園ごとに保育を観察する。（観察実習・環境実習・保育補助等）<br>・学院へ戻る。 |
| 11:00～12:00 | ・学院へ戻り、観察記録のまとめやドキュメンテーションを作成し、振り返りと話し合いを行う。<br>・各園で実際に見た子どもの姿や関わりについて、「保育を語る視点」を環境構成や保育者の援助などに焦点を当てて、深める。 |

④　指導方法の改善と充実

保育基礎ゼミの１年間の取組と３回の実習を経験している２回生において、その経験から幼児理解力がどの程度身に付けられているかを、保育基礎ゼミを半年だけ経験した昨年度の２回生との比較から確かめてみた。十分な幼児理解にまでは至っていないものの、保育を観察する際の視点の当て方や見方が異なることに気付いた。それは、学生が記録として撮影した写真に表れている。むやみに撮影しているのではなく、子どもの表情や行動のよりよく表れた場面が切り取られていることが感じ取れるのである。エピソードを記録したり、保育を分析したりする力はまだ不十分であるが、記録としての価値が感じられる写真が撮影できているのは、保育を見る視点が定まっていることの現れであるといえる。そして、さらに保育観察を積み重ねる中で、視点をもって保育を観察し、幼児の思いや願いを読み取る力が向上すれば、ドキュメンテーションの内容が充実する筈である。このことは、幼児教育における幼児理解の大切さを学生に認識させることに繋がるとともに、効果的な保育補助にも繋がると考える。日々の小さな積み重ねが、確実に学生の資質向上につながると言える。

そこで、今年度は、１回生に保育観察の仕方を丁寧に指導するとともに、記録の書き方やまとめ方について、保育基礎ゼミの事前指導の中でポイントを押さえて指導し、練習する機会をもつことにする。また、毎回のゼミの振り返りの時間には、観察し見取ったことをどのように記録したのかについて話し合ったり指導したりしていきたい。昨年度、初めての実習に行った際に実習先で記録簿の書き方を教えてもらっていないと発言する学生も存在したため、保育ゼミでの観察記録の書き方は実習記録簿の記載方法と基本は同じであること、エピソードの記録はゼミでの保育観察記録としても大切にしたい。つまり､保育ゼミでの取組は、指導の在り方次第で、実習に臨むときの不安材料となる課題の軽減にもつながるものと考えている。

## ２　観察記録の取り方の工夫と振り返りの充実

観察記録用紙は、昨年と同様に形式を作らず、Ａ４の用紙に日付と時間・場所以外、自由に書き込めるものとし、３～４行程度の振り返りの欄を入れたワークシートを作成した。また、保育を見る視点については、こちらから視点を与えるのではなく、観察者が振り返りの中で、自分はどんな視点で観察したのかということを意識して、気付きと学びを報告し、話し合うことによって、学生の気付きを引き出せるように導きたい。

記録用紙に形式を設定しないことや、保育観察の視点をこちらから提示しない理由は、観察するという行為自体に柔軟性と一人一人の感性が働くようにしておくことで､「こういう点に注意すればいいな。」とか「今日は、幼児のつぶやきを拾ってみよう。」というように、幼児の行動の捉え方や記録の取り方に自分なりの工夫が生まれ、振り返りの場での学びに繋ぐことができると考えているためである。また、イラストを入れたり図式化したりしてもよいということを伝えておくことで、自分にとって分かりやすい記録としての工夫が生まれることをも期待している。

オリエンテーションの際に準備したワークシートには、今年度の自分の目標を記述する欄を

設け、目的意識をもってゼミに臨む姿勢が大切であることを暗に示すようにしている。また、前期末、後期末には報告会や学びの発表会を設けて、学びの成果を各園の先生方に伝える機会をもつ計画である。さらに、2回生には2年間の学びを振り返り、小論文にまとめ発表する「学びの発表会」の機会を設けることにした。このような機会を設けることは、節目で自分自身を振り返り、学びの履歴を確かめることが学びの自覚化につながり、一人一人の自信にもつながると考えている。

保育専門ゼミでは、観察記録をとりながら、タブレット端末で幼児の行動や表情、保育の様子などを写真でも記録する。基礎ゼミで培った観察力によって、幼児の遊びや保育の中で生まれる思いや願いの表出する瞬間や、エピソードの一端を切り取り、ドキュメンテーションにまとめる。まとめた要点を振り返りの時間に交流して、幼児理解を深めると共に保育者の意図や効果的な援助のあり方等についても話し合えるようにしていきたい。このような一連の活動が、スムーズに運ぶようにするため、コーディネーターは、連絡調整やそれぞれのニーズの把握に努めなければならない。また、学院内の教員同士での共通理解（具体的な授業の在り方や評価規準の設定等）と協力関係の構築、指導の充実を図ることにも取り組みたい。

## Ⅱ　保育基礎ゼミ・専門ゼミの取り組みの実際

### 1　学生の幼児理解を確かなものに

◎保育基礎ゼミ（1回生）

＜概要＞

この授業は保育実践力の養成を目的とする。

同法人内の「奈良保育学院付属幼稚園」「おおみや保育園」「おおみやこども園」の3つの施設で現場体験を行う。年間を通して毎週園に行くことで、季節に合わせた子どもたちの活動や環境構成を理解できるようにする。直接子どもたちと関わるだけでなく現場保育者と共に環境整備等も行い、自身が現場に入った際、必要となる知識や技術の基本を身に付ける。

＜到達目標＞

・保育体験を通して幼児教育や保育の様々な課題を知り理解を深める。
・幼児教育や保育現場の課題を体感し、自分自身の保育観を醸成する。
・子どもと関わる保育者の職務や子どもの発達過程を観察し理解する。

※1回生は年間を通して3園を順番に経験する。

◎保育専門ゼミ（2回生）

＜概要＞

この授業は「保育基礎ゼミ」で培った実践力をさらに高めることを目的とする。

同法人内の「奈良保育学院付属幼稚園」「おおみや保育園」「おおみやこども園」の3つの施設で保育体験を行う。年間を通して毎週園に行くことで、季節に合わせた子どもたちの活動や環境構成を理解する。直接子どもたちと関わるだけでなく、保育者の保育補助や環境整備等も行い、自身が現場に入った際に必要となる知識や技術を身に付ける。

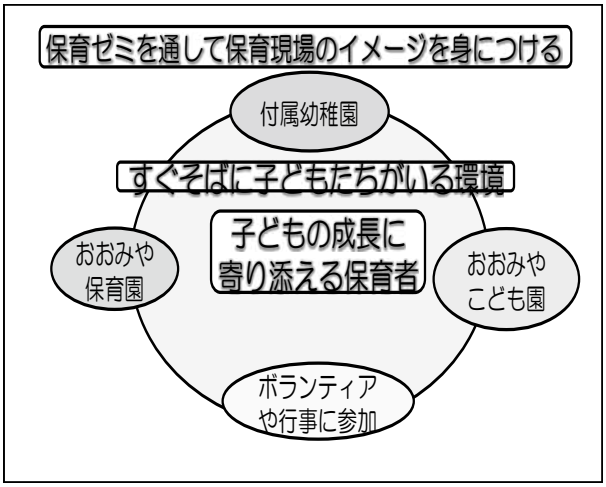
＜到達目標＞

・自分なりの視点をもって観察することを通して幼児の思いや願いを読み取ったり、保育者の意図を感じ取ったりして自分自身の保育観を醸成する。

・「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」に照らして、幼児一人一人の学びや育ちの様子を確かめ、自分自身の実践力向上に取り組む。

・保育者としての資質向上に主体的に取り組む。

※２回生は園の保育計画や保育の流れを深めるため、年間を通して同一園で経験する。




## ２　保育観察と記録の意義

保育基礎ゼミでは、各園での観察実習や保育補助（後期より）、環境実習など様々な保育体験を通して「子どもを知る」ことから始まる。中でも「遊び」を中心として観察することによって、子どもを取り巻く保育環境の意味が分かり、幼児理解へとつながっていくのではないかと考えた。また、保育専門ゼミでは写真を撮影しながら保育記録をとり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」と 関連付けながら省察し、保育者として「子どもの育ちを意識した働きかけ」とはどのようなものか、ドキュメンテーションにまとめることを通して、子どもの育ちと学びの過程を振り返ってきた。

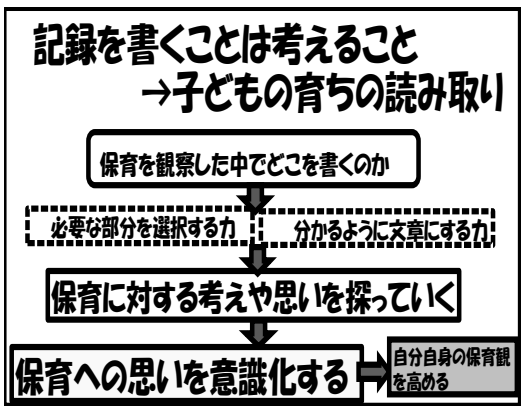
保育記録の出発点となるのは、保育観察を行っている学生自身の心の動きである。日常の楽しいことは誰しも記録しておきたくなるのと同じように、日々の保育の中で「こんな姿が見られた」といった驚きや喜びが、記録に向かう際の重要な動機となると考える。

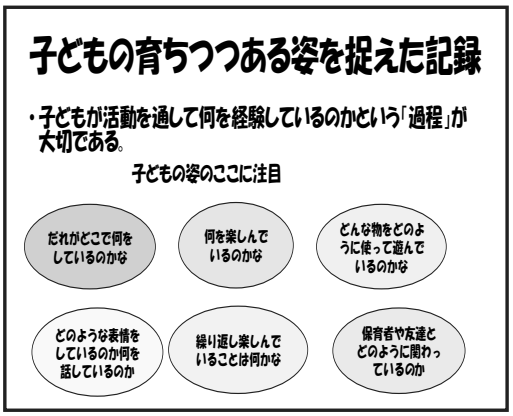
観察記録の方法としては、主にその日の保育の様子を文字や絵、写真で記録する。撮った写真の中から２～３枚プリントしてタイトルを考え、構成していく。

観察する視点として「どの子どもと関わるのか、どんな遊びに関わるのか」は、学生にとっ

て重要な視点の一つである。

観察記録やドキュメンテーションを通して子どもの姿を見つめ、その姿について考えることにより、保育者の「子どもの興味・関心、学びや育ちをとらえる視点」が育まれていくと考える。子どもの姿や学びが見えてくると、子どもの姿の展開が楽しみになり、保育という仕事の楽しさや遣り甲斐にもつながると思われる。

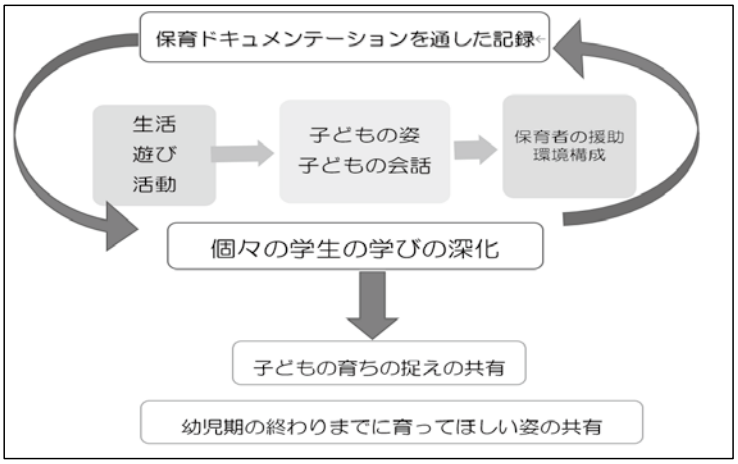



毎週継続していくことで、学生と子どもたちとの自然な関わりも見られ、顔見知りになることで､子どもたちとの距離も縮まり､子どものことを「わかろう」とする学生の幼児理解のきっかけになってきている。

保育専門ゼミでは、保育基礎ゼミで得た学びを基盤に、記録の方法としては写真を活用した保育ドキュメンテーションを作成している。設定された活動や自由に遊んでいる子どもたちの写真を用いて、どのような思いだったのか、写真から読み取れる姿を出し合いながら、話し合う。そして、毎回の振り返りを丁寧に行い、様々な視点で子どもを捉えられるようにすることで、子どもの思いや願いを言葉で表現して話し合い、幼児理解につなげることが大切である。

さらに､「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と関連付けながら、子どもの経験している内容や育ちと学びの姿、保育の意図や子どもの主体性などを考える。そうすることで、学生の学びがさらに深まり自覚化され、保育者としての資質が高められていくと考える。



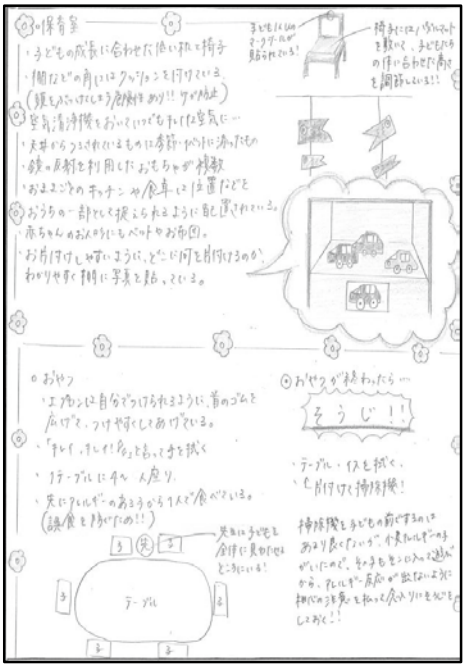

## 3　保育観察記録の実際

### ①保育基礎ゼミにおける保育観察記録の実際

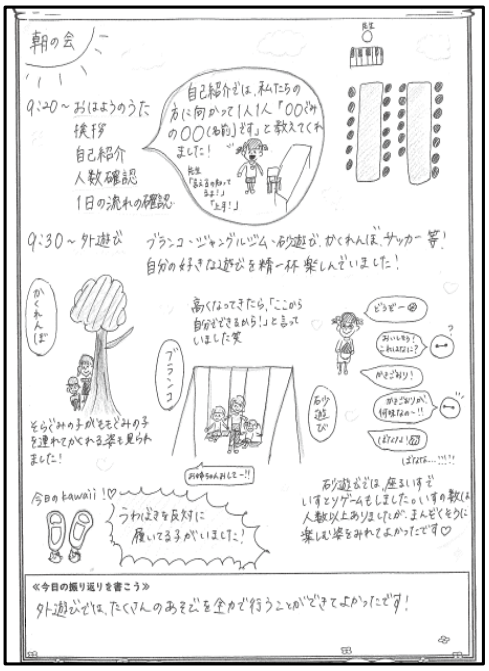
【　5歳児　】

【　3歳児　】

【　1歳児　】



【　4歳児　】




【基礎ゼミでの記録に表された学生の学びや気付き】

・子どもの姿や遊びを記録していると、記録として残したいことが次々に出てくる。しかし、それをすべて盛り込むことはできないため「今日は、このことで」と、絞っている。絞った視点が、保育者の意図、子どもの育ちなど保育のねらいかもしれない。

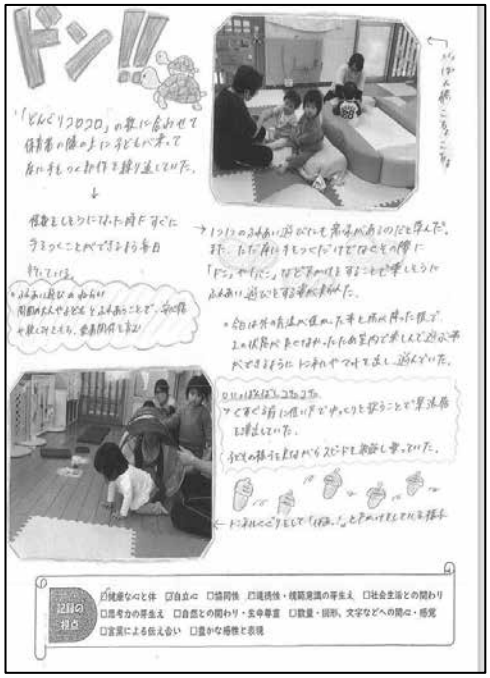
・記録の作成時間が30分ぐらいしかないため、子どもたちが体験していることを伝える工夫としてイラストや環境図などを入れ、子どもたちが今どのような状態にあるのか、後で見ても気付ける記録として仕上げている。

・乳児の場合は、一人一人の個人差や発達過程に応じた環境や関わりが大事であること、よく観察してみると、一見同じことをやっているように見えることも、よく見てみるとそれぞれ違うことに気が付いた。一人一人に対する幼児理解がまだ十分とは言えないということに向き合わなければならないと感じた。

・子どもたちの年齢が上がるにつれ、一緒に遊ぶ子どもたちの人数も増えていく。年齢に応じた保育者の関わりや子どもの主体性を大事にした言葉掛けなど、子どもの内面を理解した関わりは、考えていた以上に難しいと思った。

②保育専門ゼミにおける保育ドキュメンテーションの実際

【　0歳児　】




【　5歳児　】

【　4歳児　】

【　5歳児　】

【専門ゼミでドキュメンテーションに表された学生の学びや気付き】

・ドキュメンテーションについては、どうまとめたらみんなに分かりやすく見やすくできるのか、写真の位置や、テーマ、レイアウトなど工夫した。
・継続して同一園で、子どもの言葉や行動に視点を置いて観察することができ、次に向けての言葉がけのタイミングが分かった。
・子どもの視点から物事を捉えることにより、何に興味をもっているのかなど以前より分かるようになった。「10の姿」にあてはめることで経験している内容が分かるようになった。
・保育を観察する際、子どもの表情などから気持ちを読み取り、記録することを意識した。
・ドキュメンテーションを作成する際に、子どもがつくった作品に対して、子どもの言葉を想像し吹き出しを書いたり、気持ちを表現するのに吹き出しを活かしたりした。
・保育者は、子どもたちにどのように育ってほしいと思って行動しているのか、どのような思いで言葉がけをしているのかなど、気を付けて観察することで、10の姿と結び付けて観察できるようになった。
・ドキュメンテーションを作成する際に、子どもが発した言葉が分かりやすいように吹き出しの形を変えた。
・子どもの姿の何を観察するのか、なぜこう思っているのかなど、子どもの思いを推測することで、より学びが深まった。

## 4　学生同士の学び合いの実際

①保育基礎ゼミにおける学生の学び合い

・毎回、３園のグループごとに振り返りを行っているが、前期末及び後期末には全員でゼミを振り返り、学び合えるようにした。少人数のグループを編成してグループワークを行い、グループで話し合ったことを共有する場をもつ。全員がきちんと活動に参加するできるようにするため、グループ編成は３・４人とし、ゼミで行く３園が混ざるよう配慮した。
・最初に、各自のこれまでの記録をグループで輪読し合い情報交換を行う。次に付箋を思考ツールとして用いる「KJ法」で話し合った。学生自身が保育観察を通して読み取った子どもの姿、保育者の援助、環境構成を各自付箋に記入し、伝え合った。

・一人一人の気付きや学びを紹介しながら付箋を貼り終えた後、共通する視点でグルーピングを行い、その視点でラベリングする。ラベルにどのように見出しをつければよいか、キャッチコピーはこれでよいかなどと質問してくるグループや、協力性が不足しているグループもあり、時には意図的に突っ込んだ質問をし、確認をするなどして関わるよう配慮した。
・積極的な学生と消極的な学生の差が見られるため、最初からグループ単位で活動するのではなく、まずは自分自身の気付きや学びを記入してから、交流するようにした。
・グループの学び合い（「KJ法」）の振り返りとして、学生から出てきた主な感想は、以下の通りである。

・各自、学んだことをまとめたことによって，改めてどのようなことを学び，何が不足していたのかを確認することができた。
・子どもとの関わりにおいて、様々な場面でどのように向き合うべきか今後も考えていくことが必要である。
・子どもの年齢による違いを知り 年齢に応じた保育者の援助や配慮の仕方を感じることができた。
・各自、学んだことをまとめたことによって，改めてどのようなことを学び，何が不足していたのかを確認することができた。保育者の援助や配慮の仕方を感じることができた。
・グループのメンバーと協力し，意見を出し合っていくことで，各々の考えを深めていくことができた。
・各自、学んだことをまとめたことによって，改めてどのようなことを学び，何が不足していたのかを確認することができた。
・子どもとの関わりにおいて、様々な場面でどのように向き合うべきか、今後も考えていくことが必要である。
・子どもの年齢による違いを知り 年齢に応じた保育者の援助や配慮の仕方を理解することができた。
・グループのメンバーと協力し，意見を出し合っていくことで，各々の考えを深めていくことができた。

以上のようにして、学生全員が、各期の保育基礎ゼミでの学びを振り返り、成果と課題を明らかにするとともに、それぞれが得た学びを報告するために、テーマを決め報告することとした。報告会では、各園の先生方から具体的な指導を得ることができた。

② 保育専門ゼミにおける学生の学び合い

保育ドキュメンテーションの写真は、幼児が何を考え、何を経験しているのかエピソードを記録する手段である。回を重ねる中で、次第に状況がよく分かる場面を写真に収めることができるようになるとともに、視点を定めてドキュメンテーションを作成できるようになってきている。しかし、全体を漠然と観察し、保育補助をする中では、子どもの行動や思いに気付く力、読み取る力を分析するまでには至らないのが現状である。毎回のゼミでは、限られた時間でのドキュメ

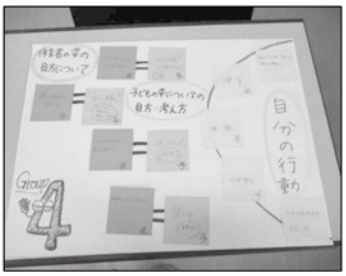
ンテーションの作成となるため、３園ごとのグループでの振り返りにとどまっていた。そこで、前期のまとめの段階で、各自、お気に入りのドキュメンテーションを選び、書画カメラを通して内容について報告した後、付箋を思考ツールとして用いる「KJ法」でグループワークを行った。

グループは、学生を３～４人ずつのメンバーとし、園が偏らないように編成した。学生自身が保育観察を通して読み取った記録やエピソードからの学びや自分自身の成長と課題等を付箋に書いて出し合った。出し合ったものを似通った内容でグルーピングして、見出しを付けてわかりやすくレイアウトし、報告会につなげていけるようにした。この方法を用いると、一人一人が付箋に自分の意見を書いているため、他の学生の意見を自分とを比べながら受け止めることができる。似た意見をまとめて付箋をグルーピングし、カテゴリーごとに見出しを付けてまとめたりレイアウトを考えたりする作業も楽しく取り組めていた。

次に、グループで 話し合ったことを伝え合った。学生全員で質疑応答を行うことによって、共有した情報をさらに深めていくことができた。また、グループ内での話し合いでは、学生一人一人が、自分にはない見方・考え方に触れ、視野を広げる機会となった。同じ体験をしてもそれぞれ観察した視点が異なるため、「KJ法」は、学生の学びを次のステップに繋ぐために有効であるといえる。しかし、各グループの状況としては、メンバーが揃わない、協力的でない学生も存在するなどの理由で、最終的に短時間で仕上げるグループもあり、グループによって温度差があった。また、グループによっては、授業を休んでいた消極的なメンバーにラベルをきちんと出すよう働きかけて、協働で作成しようと努力する姿も見受けられた。

このように、全員での振り返りは、次の課題を明らかにする手段として有効であった。また、各園のグループ内だけでなく全体で共有することで話し合いの内容も深められていった。前期のまとめとしての学生の気付きは、課題を明らかにするきっかけになったと思われる。

このようにして、学びを振り返ったことで自分自身の学びを自覚化することができた。そして、報告会に向けてテーマを設定してまとめたことを報告し、指導を受けることができた。



## 5　保育基礎ゼミ・専門ゼミの報告会

目的　・前期の保育ゼミを振り返り、学生一人一人が学びの成果と課題を明らかにする。
・グループで学びの成果を出し合い、話し合うことを通して、それぞれの保育観を高める。

内容　・３園に分かれて、保育ゼミの学びの成果と課題を発表する。
・各園の保育者から、保育をみとる視点や保育の見方だけでなく、保育者としての心構えなどについてアドバイスや指導を受ける。
・保育者の方からいただいた指導を基に、自分自身の新たな目標を設定する。
・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を手掛かりに、幼児の成長の様子を捉えられるようになるためには、保育をどのように見るとよいのか、保育者の立場からアドバイスをいただく。

①　報告会までの主な流れ

≪１回生≫　７月８日　各園グループでの保育観察
施設ごとのグループで事後指導を行う。
保育ゼミのワークシートに振り返りを記入し報告テーマを決める。
７月11日　前期の保育ゼミで学んだことをグループで交流し合う。
７月16日 午前：報告会の発表原稿を確認し、前期の学びと自分自身の課題を出し合う。
午後：各園に出かけ、各自学びと成果を報告する。

≪２回生≫　７月９日　各園グループでの保育観察
施設ごとのグループでドキュメンテーションを作成し交流する。
保育専門ゼミのワークシートを仕上げ､報告会のテーマを決める。
７月16日　これまでのドキュメンテーションのファイルをグループで輪読した後、各自のお気に入りを選ぶ。
お気に入りの交流と前期の自分自身の成長と課題や保観観について話し合う。
報告会での発表原稿を仕上げる。
７月24日　各園に出かけ、各自の学びと成果を報告する。

②　基礎ゼミ・専門ゼミの報告会

各園での報告会では、学生たちが、どのようなことを感じとったり学びとったりしたのか、要点をまとめたものを発表し、その内容に対して園長先生や主幹教諭からコメントやアドバイスをいただいた。

報告会という場をもって一人一人の学びを伝えたことは、それによって学生たちが自分の考えを深めたり、自分とは異なる見方・考え方に触れたりすることに繋がり、多様な見方・考え方を受け止めることの大切さに気付くことが出来るようになると分かった。また、記録

をもとに自身の保育観や保育実践を見つめ直していくことの大切さも、学生たちは感じ取れたのではないかと考えている。

≪２回生の報告テーマ（前期）の例≫

| | |
|---|---|
| おねえちゃん、遊んでくれてありがとう | 子どもと関わり学んだこと |
| 手遊びはやっぱり大事！ | 子供が安心できる保育 |
| 保育者としての視点をもつ | 専門ゼミで学んだこと |
| 知ること大事、発見たくさん！ | 園での生活 |
| 保育の声掛けの重要性 | 保育者の子どもへの関わり、言葉掛け |
| 子どもにとって一番の保育ができるように！ | 保育者の」援助の大切さ |
| ワクワク・ドキドキから始まったこども園 | 保育者の子どもへの関わり |
| 子どもと保育者の信頼関係 | 乳児保育 |
| こども園をとおして | 子どもとの関わりと自分自身の成長 |
| 子どもへの声掛けの大切さ | 保育における楽しい遊びの広げ方 |
| 子どもの主体性 | |
| 保育者の声掛け | |

報告会についての学生の振り返りから、記録やドキュメンテーションを作成して終わりにせず、グループで振り返りをすることで、様々な角度での見方や考え方があることに気付いていること分かった。また、ドキュメンテーションは、写真を通して子どもの活動過程を「見える化」し、子ども理解を深められる効果があると言える。

保育ゼミでは、毎週子どもと関わることができるため、季節による環境の変化や季節感の感じられる子どもの遊びなども理解できていた。また、子どもの姿を常に意識することで、子どもがなぜそのような言葉を発したのか、動きや表情を読み取ることで、子ども同士の関係性や、保育者と子どもとの関係性なども理解できるようになったことなどが、学生の振り返りから読み取れた。

今回の報告会は、一人一人の学生の今後の目標や課題に対する姿勢につながり、自らが目指す保育者としての資質を高めていくこともにつながったといえる。

保育園での報告会終了後、園長先生から保育園でもドキュメンテーションを通して研修していることを教えていただいた。子どもの育ちを省察し、幼児理解を進めていくことがとても大切であると言われていた。保育の省察では、悪い面に注目するのではなく、子どもの成

【　おおみや保育園で作成された保育ドキュメンテーションから学ぶ　】

長を語り合うことで保育が楽しいと感じ、子どもの魅力を発見する力になっているということである。また、ドキュメンテーションは、保護者を巻き込み対話が広がっていること、写真を通して伝わる内容に深みが生まれることなど、保育現場での取組と効果を教えていただいた。このような園との密接な連携と協力体制は、理論と実践を結びつける格好の場であり、充実した保育実践の継続と教育環境は、保育・幼児教育の専門家としての豊かな知識とより確かな実践力の向上をもたらすことに繋がるものと考える。

保育実習、教育実習（第１段階）を経験した１回生は、１年間基礎ゼミに取り組んできたことによって、どのような学びがもたらされたのであろうか。教育実習終了後（12月）に実施したアンケートに表された、基礎ゼミに対する学生の評価は以下の通りである。

・基礎ゼミで子どもと関わってきたので、実習で子どもと関わる際、関わるタイミングがつかめた。
・トラブルの際の対処が自分なりにできた。
・ゼミで５歳児に関わった経験があったので、５歳児の製作の説明の仕方が役に立った。
・ゼミでいろいろな年齢の子どもたちに関わってきたので、年齢ごとの接し方、保育者の話し方のイメージをもつことができた。
・ゼミで子どもたちの様子を記憶し、あとで記録をまとめることで、記録を書く練習になった。
・子どもの生活の流れを知ることができた。また、保育者の子どもたちへの接し方を見ることができ、遊びや生活の場での声掛けが分かった。
・保育者の環境構成の意図が理解できるようになった。
・担当の年齢と同じ年齢の子どもたちに関わっていたので、部分指導で活動を考える際、事前に考えておくことができた。
・一日の保育の流れがなんとなくわかっていたので実習記録を書くのに活かせた。
・毎回ゼミの後で、記録を書いていたので、実習記録がスムーズに書くことができた。
・実習の記録の書き方、特に保育者の援助の書き方が書けるようになった。

・メモの取れない状況でも必要な部分だけを記憶していると、スムーズに前後に行っていた活動とつなげることができたのは、ゼミでの記録の経験からである。
・園や保育室の環境を見て、保育者の意図を学ぶことができた。
・子どもの活動のどこを見ればよいか、ゼミで記録の練習をしていたので記録簿でも活かすことができた。
・花プロジェクトを経験していたので、実習先で花植えの際、保育者の立つ位置や活動の流れが予想できた。
・ゼミで活動の流れの時間を見る癖がついていたので、それに合わせて保育者がどんな動きをしているのか観察の視点がもてた。
・ゼミで毎週子どもとの関わりがあったので、積極的に子どもたちと関わることができた。
・ゼミの記録の積み重ねが実習記録簿につながり、記録を書く時間が少なくなり、睡眠時間も普通にとれた。また、子どもとの関わり方、目線を合わせること、保育の関わり方、保育者の年齢別の声掛けの仕方、意図、環境構成のねらいなど自分なりに考えることができた。
・子どもとの関わりの中で、見守るべきか、教えるべきか戸惑うことが多かったので、次回のゼミの時はそのような視点をもって学んでいこうと思った。

アンケートから読み取れたことは、子どもの様子、遊びの様子、園生活の様子、幼児の実態（その時期の特徴）、環境構成、保育者の思い、保育者の関わりなどが実習の参考になったということである。実習前の11月の遊びの様子の観察と関連付けて、「実習中にも実習園で同じような遊びが続いていて、遊びの連続性を感じた。」、「その時の子どもの姿と実習中の子どもの姿が結びついて幼児理解の手助けになった。」など、子どもの姿を重ねて考えたり捉えたりする記述もあり、基礎ゼミでの体験が学生の学びとなり、実習に活かされていることが分かる。反面「子どもたちの状況に応じて、保育者がどのように関わりを行っているのか、具体的にイメー ジすることが難しい。」、「この時期の子どもたちにどんな援助をしているのか年齢別に具体的に考えることが難しい。」など、具体的な援助に関する記述も目立った。実習終了後の保育基礎ゼミでは、実際の様子から具体的に学ぶことと、振り返りを通して理解したり保育者の思いや考えを知ったりすることの重要性にも言及されていた。保育ゼミでは、観察して記録をとるという基本からスタートしたが、より一層幼児理解の大切さを学生が実感できるように導きたいと考える。

１月31日には、１回生の後期基礎ゼミのまとめとして、報告会を実施し、学生一人一人が後期のゼミでの学びを振り返り、成果と課題を明らかにするとともに、専門ゼミへの期待感を高めた。

③　専門ゼミにおける「学びの発表会」

目的　・２年間の学びを振り返り、自分自身の成長や考えたことなどを中心に論作文にまとめることを通して、自分が身に付けた保育実践力や学びによって得られた保育観等を確認する。

・得た学びを文章にまとめることを通して、自己の学びを自覚化するとともに、価値づけて、達成感を味わう。

・自分の学びをまとめることを通して、保育者としての自覚をもち、社会人としての責任感と使命感を高める。

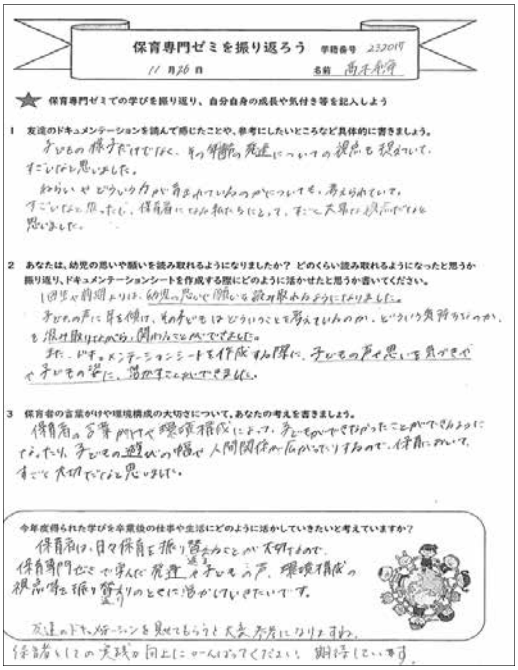
内容　これまで作成してきた保育観察記録やドキュメンテーションを振り返ることを通して、自分が得た学びを再確認し、保育者としてどうあるべきか、また、これから自立した社会人として自分の理想の姿に近付くためにどのようなことに挑戦していくのか考えられるように導く。

書くことが苦手な学生が意欲をもって書き進められるようにするために、段階を踏んだ振り返りを行うことを計画した。まず、前期の振り返りと同様に、後期を自分の立てた目標に照らして振り返り、後期の専門ゼミを通してどこまで自分自身が成長できたか自己評価する。次に、自分の作成したドキュメンテーションを見直して自分の学びを洗い出し、「KJ法」でグループワークを行い、２回生全員で共有する場をもつ。前期にはこの段階で、報告会での自身の報告テーマを設定したが、今回は２年間の学びを振り返るため、自分自身の得た学びを価値づけるための作業を入れることにした。

これまで保育ゼミの振り返りの際に、「幼稚園教育要領解説」や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」及び「保育所保育指針解説」で確かめる作業を行う時間的余裕がなかった。そのため、この段階で１年間を振り返り、自分自身が得た学びの一つ一つが、これらの解説書に書かれた「五領域」の目標や内容のどこに書かれている事柄に当たるのかを書き出すことにした。この作業の中で学生たちは、自分の得た学びがすべて「五領域」で目指している保育内容と繋がっていることに気付くことができ、自分が観察して見取ったことが、幼児理解や保育者の援助内容に繋がることを確認することになった。そして、これまで学んだことが、自分自身の保育者としての資質・能力の向上に繋がっていると実感でき、2000字程度の論作文にまとめることへの抵抗感を低くすることに繋がったといえる。

普段書くことに苦手意識をもつ学生は、レポートやワークシートへの記述が雑になったり詳しく表現できなかったりしがちである。特に実習記録簿への記載には苦労が伴い、１日の記録をまとめるのに数時間を要している姿が散見される。そのため、学びの発表会に向けた準備が間に合わなくなることも予想された。しかし、実際に取り組んでみると、2000字論作文の下書きの完成に時間を要した学生もあったが、欠席しがちな学生以外は、概ね順調な仕上がりとなった。段階を踏んで指導することの効果を実感できることに繋がった。そして、この後、２～３ページのスライドを作成して自分の学びを発表した。

≪自身の学びを振り返る≫


保育専門ゼミを振り返ろう　学籍番号 232014　11月26日　名前 [illegible]

★ 保育専門ゼミでの学びを振り返り、自分自身の成長や気付き等を記入しよう

1　友達のドキュメンテーションを読んで感じたことや、参考にしたいところなど具体的に書きましょう。

子どもの様子だけでなく、その年齢の発達についての視点も見ていて、すごいなと思いました。
ねらいやどういう力が育まれているのかについても、考えられていて、すごいなと思ったし、保育者になる私たちにとって、すごく大事な視点だなと思いました。

2　あなたは、幼児の思いや願いを読み取れるようになりましたか？ どのくらい読み取れるようになったと思うか振り返り、ドキュメンテーションシートを作成する際にどのように活かせたと思うか書いてください。

1回生や前期よりは、幼児の思いや願いを読み取れるようになりました。
子どもの声に耳を傾け、その子どもはどういうことを考えているのか、どういう気持ちなのか、を汲み取りながら、関わることができました。
また、ドキュメンテーションシートを作成する際に、子どもの声や思いを気づきや子どもの姿に、活かすことができました。

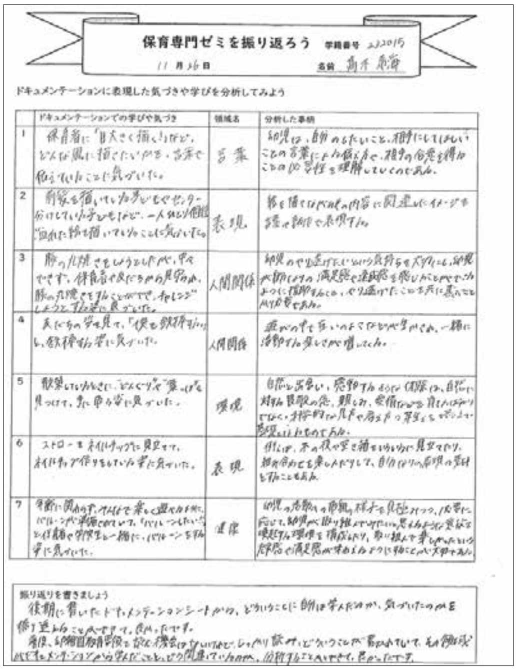
3　保育者の言葉がけや環境構成の大切さについて、あなたの考えを書きましょう。

保育者の言葉がけや環境構成によって、子どもができなかったことができるようになったり、子どもの遊びの幅や人間関係が広がっていったりするので、保育においてすごく大切だなと思いました。

今年度得られた学びを卒業後の仕事や生活にどのように活かしていきたいと考えていますか？

保育者は、日々保育を振り返ることが大切なので、保育専門ゼミで学んだ発達や子どもの声、環境構成の視点等を振り返りのときに活かしていきたいです。

友達のドキュメンテーションを見せてもらうと大変参考になりますね。
保育者としての実践力向上にがんばってください。期待しています。


保育専門ゼミを振り返ろう　学籍番号 232015　11月26日　名前 [illegible]

ドキュメンテーションに表現した気づきや学びを分析してみよう

| | ドキュメンテーションでの学びや気づき | 領域名 | 分析した事柄 |
|---|---|---|---|
| 1 | 保育者に「大きく描く」などと、どんな風に描きたいかを、言葉で伝えていたことに気づいた。 | 言葉 | [illegible] |
| 2 | [illegible] | 表現 | [illegible] |
| 3 | [illegible] | 人間関係 | [illegible] |
| 4 | [illegible] | 人間関係 | [illegible] |
| 5 | [illegible] | 環境 | [illegible] |
| 6 | ストローをネイルチップに見立てて、ネイルチップ作りをしていた姿に気づいた。 | 表現 | [illegible] |
| 7 | [illegible] | 健康 | [illegible] |

振り返りを書きましょう

[illegible]

≪学びの発表会（１月14日）≫

観察時でのドキュメンテーションをもとに発表のテーマを各自考えた。そして、各自のテーマを「子どもの育ちに関すること」「保育者の役割に関すること」「これから保育者になる自分自身のこと」と分類し発表することにした。また、発表内容を分かりやすく伝える方法として、要点をパワーポイントのスライド２～３枚にまとめたものを準備した。

| 小論文のテーマ |
|---|
| 子どもの思いをくみ取る保育者 |
| 保育者による一つ一つの言葉がけの大切さ |
| 保育者の言葉がけの大切さ |
| 保育者の援助の大切さ |
| 主体的な活動を促すための保育者の援助 |
| 私が考える理想の保育者とは |
| 保育者の援助と子どもの育ち |
| 子どもの主体性を大切にした保育 |
| 保育者の言葉がけや環境構成 |
| 保育者、子どもの姿から |
| 表現する力・伝え合う力 |
| 子どもと保育者と環境 |
| 幼児の気付きを促す保育者の言葉がけ |
| 子どもたちの興味・関心を高める保育者 |

| 小論文のテーマ |
|---|
| 「言葉」との出会い |
| 保育の中での幼児の学び |
| 年齢による人との関わりの深まり |
| 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿 |
| 幼児の思いをつなぐ保育・教育 |
| 友達や異年齢児とのとのかかわりから育つ |
| 友達とのかかわりから育つ子どもの姿 |
| 遊びから得られるもの |
| 集団保育ならではの子どもの育ち |
| 友達や周りの人と関わり育つ子ども |
| 子どもの成長と異年齢児の交流 |
| 友達とのかかわりから育つ子どもの姿 |

| 小論文のテーマ |
|---|
| ゼミで得た体験と学びについて |
| 保育者に求められる資質・能力とは |
| 子どもと保護者の信頼性 |
| 保育者の援助と子どもの育ち |
| 信頼される保育者になるために私が大切にしたいこと |
| 子どもはどこから世界の文化や伝統行事の知識やイメージを得るのか |
| 保育観察や授業を通しての学び |
| 信頼される保育者になるために私が大切にしたいこと |
| 子どもの心の動きに寄り添うことの大切さ |
| 保育士の専門性 |
| 保育者と子どもの姿から学んだこと |

## Ⅲ　３園の行事や活動での連携とコーディネートの実際

### １　「花いっぱいプロジェクト」

「花いっぱいプロジェクト」は、毎年行われる保育学院としての活動である。各園の園児と一緒に実施してきており、定着している活動である。この活動を保育ゼミの活動として実施するために、年間計画の中に位置付けた。そのため、実施時期をいつにするのか等について、新年度が動き出すまでにコーディネーターが調整している。そして、春の「花いっぱいプロジェクト」は２回生が専門ゼミの活動として実践し、秋の方は１回生が基礎ゼミの活動として実践する。３園それぞれの保育計画や行事予定、施設面での保育環境には違いがあるため、細かい点については各園で考えていただくが、園児に対する動機付けや苗の植え方の説明および植え付けについては学生が主体的に実習させていただいている。

１年間の保育ゼミの経験のある２回生は、園児の意欲を引き出すためのテクニックがなかなかうまいなあと思わせてくれた。「あなたのおなまえは」という歌を使って、一つ一つの花にも名前があることを意識づけたり、植え方のポイントを絵に描いたものを使って説明したりして、場の雰囲気づくりや視覚による援助など、学んだことを活かしていた。また、おおみやこども園では、花の苗植えと畑への苗植えを同じ日にできるように計画され、時間的な効率面を考えておられることが感じ取れた。

計画段階でのコーディネーターの動きが、連携した取り組みの充実にも繋がることから、年間を通じて、いつ頃どのような動きが必要かを洗い出しておくことも必要である。

## 2　遠足や園外保育での引率補助

前期の計画段階では、おおみや保育園とおおみやこども園の園外保育と遠足が引率補助の機会として保育専門ゼミに位置付けられていた。そのため、クラス別の行先や行程、経路等の詳細についての打ち合わせを行うとともに、学生をどのように動かすかという学院側の計画を取り急ぎ立てることが必要となった。また、園児がバスを利用することに伴って、学生の動きをどうするのか、バス代等の費用負担をどうするのかという課題も見えてきた。

そこで、学生はできるだけゼミの時間内で引率補助を行うこと、バス代等の費用は学院の方で後日精算してもらうこと等、基本的な条件を整えた上で、学生の動きや行先の配当を考えることにした。今回は保育園とこども園の行事であるため、保育園グループとこども園グループをそれぞれ引率先のグループに分けて、引率補助にあたるようにした。

後期には、まず保育園の遠足が専門ゼミの日に実施されることになっていた。前期と同様に、保育園グループを行先別に分けて、引率補助を実施することにした。天王寺動物園に公共交通機関を利用していく計画であったため、授業の取り扱いに対する配慮をお願いした。昼食の取り方を変更することで、授業に間に合うように計画できた。本来ならば、全面的に同行できるようにするべきなのかもしれないが、午後の授業科目の時間を確保することを優

先した。

10月22日、保育園の３歳児 柏木公園キッズパーク、４歳児 東大寺大仏殿、５歳児 天王寺動物園の遠足の引率補助をさせていただいた。遠足の引率で学生に任された主な仕事内容は、バス乗車の補助、安全面を配慮した歩き方・見学の仕方、休憩ポイント等でのトイレの補助、昼食の補助であった。多くの人数を引率する上でのマナーなどをさらに細かく考える必要があると実感した。実際に体験することで初めて気付くことが多く、学びの多い一日となった。

【参加した学生の学び・気づき】

・遠足の引率を行った学生の保育者の側から見た保育活動で気付いたこととして先生の声かけの工夫である。例えば、子どもたちに気を付けて欲しいことや注意する時は声を低く、楽しいことや明るい話は声を高く明るく出していた。

・子どもに大切なことをたくさん伝える時に、話の途中で「まだ聞ける？」と声をかけたり、子どもが集中できるように受け答えをしたりする保育者の姿があった。

・保育者同士のチームワークである。常に保育者同士で他のグループと情報交換をしたり、子どもたちの手が離れる合間を利用して次の行動の計画を再確認したり、相談をしたりしていた。

・保育者の子どもに対する観察力である。少し疲れた子の様子やバスで少し体調が悪い子にすぐに気付き声をかけていた点である。

・子どもたちの様子について気付いた印象的な点は、子どもたちが予想以上に協力し合い、いろいろなことが自分でできていたことである。他には、自分でできることは「自分でできるよ。」と自分の気持ちをしっかりと伝えられた点である。自分でできることは自分でするという指導が日頃から園で行われていることにも気付き、普段の生活の中での指導の大切さも知ることができた。

付属幼稚園の「森の幼稚園」が２学期に７回計画されていた。複数回の実施となっていることから、幼稚園グループの学生にはどのように引率補助をしてもらうことが適切かを検討した結果、時間割を一部変更して11月19日の１日を運営補助に充てることになった。そして、園児がバスから降りるキャンプ場への入口で待ち合わせ、安全にキャンプサイトまで行けるよう、安全確保に努めた。また、学生は、キャンプフィールドでの活動が円滑に進められるよう、安全面に気を配りながら、一人一人に応じた援助に努めた。

園外の公共施設を活用した保育は、どのようにして安全安心が確保された環境で行うかという点が課題である。一人でも多くの支援者が存在することで、子どもも保育者も活動に没頭し楽しむ事ができると感じられた。

### 3　運動会の運営補助

①　保育園運動会

９月28日（土）白藤学園おおみや保育園の運動会が、本学体育館で開催され１回生の有志６名が、ボランティアとして運動会の運営補助を行った。１回生は、毎週月曜日に保育基礎ゼミで保育観察、保育補助をしており、運動会に至るまでの過程を見てきている。今回は、運動会における保育者の役割を体験して、子どもたちの成長を感じることができたようだ。

【参加した学生の気づき・学び】

・すべての園児への応援や後片付けなど、保護者の方も協力的で、みんなで運動会を作り上げようという気持ちが伝わってきた。運動会の実施には、たくさんの人の力が必要だと実感した。
・実習で運動会に向けての活動の過程を見ていたので、子どもたちの練習の様子から成長を感じることができた。
・当日、子どもたちの一生懸命頑張る姿を見て、全力を発揮できるような環境を構成する保育者の援助が、いかに重要か学んだ。
・自分たちが拍手や手拍子をすることで、保護者の方も協力してくださり、運動会全体がより盛り上がった。
・子どもたちが一生懸命走ったり楽しく踊ったりしている姿を見て、将来、自分も子どもたちが楽しめるような保育ができる保育者になりたいと思った。リレーで転んでも最後までゴールに向かう姿や次の走者にバトンをつなぐ姿に感動した。改めて、子どもの可愛さや子どもの一生懸命な姿をとても素敵だと感じることができた。子どもが更に大好きになる一日だった。
・自分の出番になると張り切って笑顔で頑張っている輝いた子どもの姿を近くで見守ることができて本当に良かった。

学生は、プログラム進行の補助を通し、子どもたちの競技や演技に臨む姿を身近で感じる

ことができた。また、運動会での保育者の姿から、将来、自分たちが働く際の具体的なイメージももつことができた。今回のボランティアを通して、直接園児と触れ合うことの楽しさを味わうと共に、園の行事運営に関わることができ、貴重な経験となった。

② こども園運動会

10月５日、２回生の学生４人がボランティアで運動会の運営補助として参加した。年間を通した保育専門ゼミだけでなく、６月の教育実習でも子どもたちと関わりがあり、運動会に至るまでの子どもたちの姿を見てきている。そのため、この活動を通して運動会における保育者の役割を、経験を通してして学ぶとともに、子どもたちの成長を感じることができた。

【参加した学生の学び・気づき】

・プログラムを決定する場合には、子どもの年齢だけで決めずクラスの特徴や園児の個々の発達状況にあわせて、どのようなプログラムにするのか、いつごろから内容を決めていくのかと思った。
・年長児のダンスでは、『ダイナミック琉球』という、とても壮大で胸に響くような素晴らしい歌に合わせ力強い踊りになっていた。何回か専門ゼミで、練習の姿を見た。子どもたちの「こうしたい」「こんなふうにしたい」という気持ちをみんなで話し合っている場面を見た。日頃から、子どもたちの声に耳を傾け、興味・関心をつなげていくことが気持ちを盛り上げていくと感じた。
・子どもたちには、準備や片付けをしたり、プログラムの進行の紹介をしたりなどの役割もあった。年長児が役割をもつことで運動会への取組に意欲がわき、友達と力を合わせる大切さ、楽しさを実感できたのだと感じた。
・ボランティアとしては、事前に役割などを把握しておく必要があった。道具を出すタイミング、安全面への配慮、片付けのタイミングなど事前に打ち合わせのお願いをしておくことが大事だと思った。

③ 付属幼稚園運動会

10月26日（土）、付属幼稚園運動会に１回生５名・２回生４名がボランティアで参加した。多くの家族の方の応援を受け、子どもたちの笑顔と先生方の真剣さを肌で感じた運動会で

あった。運動会のプログラムに沿った準備や片付けなど、事前に打ち合わせをしておいたことで、チームワークよく進めることができた。

【参加した学生の学び・気づき】

・今年は、オリンピックの年であり、子どもたちの運動会も「ジェシカオリンピック」と命名され、内容も子どもたちと考えられていて、わくわくした運動会であった。
・普段、遊びの中で年齢の枠を超えた交流があるので、運動会の内容の中にもお互いを応援する姿が見られた。
・かけっこや跳び箱など、うまく出来た友達に素直に拍手を送る姿と、一生懸命している友達を応援する姿が印象的であった。
・頑張ってきた練習、力を出し切った本番当日の子どもたちの姿を見て、来年の今頃は自分も保育現場でこのように子どもたちとともに頑張っているのかなあと「保育者」に近い目線で参加できた。
・普段と違う雰囲気であるため、なかなか集中できない子に対しての声かけの難しさを痛感する場面があった。ただ「〜しなきゃ。」「〜する時間だよ。」ということを言うだけでは、その時だけは集中しても、すぐに集中がきれてしまうということを経験した。演技前は、「注意をする」のではなく、子どもたちに興味をもたせていくような言葉かけを心がける必要性を感じた。

### 4　ボランティアやアルバイトの要請

付属幼稚園とおおみやこども園には、預かり保育の時間がある。この時間の人手不足を補うためのアルバイトやボランティアの要請、夏期・冬期・春期休業期間中の預かり保育のアルバイトの要請が主なものである。また、保育園では、休日に行われる夏祭りへの協力要請もある。

これらは、保育ゼミの時間とは全く異なる活動であるが、要請に応じてコーディネーターが学生に呼びかけ、人員を確保するようにしている。その理由は、就職活動にも役立つ経験となると判断しているからである。預かり保育の時間に拘わると、お迎えに来られた保護者にどの

ように対応されているのかということを目の当たりにすることができる。学生が直接保護者と関わることがなかったとしても、この時間帯における保育者の姿に触れることができることは、貴重な体験である。ボランティア経験の大切さや必要性を感じ取り意欲的に取り組んでみようとする学生を増やしていきたい。

## Ⅳ　成果と課題

### 1　成果

#### ①　コーディネーターの必要性

保育ゼミでの取組を、３つの系列園の協力を得て取り組むためには、それぞれの思いをつなぐためのコーディネーターの存在が必要であることが確認できた。互いに得るものがあるからこそ、協働性が育まれていく。また、学院内でも３グループ間の情報共有や毎回のゼミでの留意点等を確認して、活動する必要がある。気付いたことを忌憚なく出し合い情報は共有し合うために、今後もフットワーク・ネットワーク・チームワークの「３ワーク」を大切にしていきたい。

#### ②　振り返りの大切さ

成果を急がず、学生の成長をその姿から読み取り、思いを引き出しながら育てる姿勢を指導者が心がけることが必要であるとわかった。事後の振り返りの場において学生の気付きを引き出し、指導者はワークシートへの記述を丁寧に分析的に評価していくこと、良さを認めるコメントを入れることを今後も疎かにしないようにしたい。また、学生一人一人が自分自身の目標を設定して取組み、振り返ることで、次の課題への意欲がもてるようになると実感できた。

#### ③　学生同士のグループワークや対話の効果

全員参加を可能にする手法の活用や、一人一人の思考を促す手立てを工夫しながら学生の思考力や文章表現力、創造力を高められるよう、指導者も向上心をもって指導に当たりたい。そうすることによって保育者としての基礎力が徐々に育成されることが分かった。

#### ④　報告会や発表の機会をもつことの効果

節目での報告会や発表会をもったことで、自分自身の成長を学生は自覚し、次への意欲をもてるようになっている。報告会の場で、一人一人へのアドバイスを受けたことによる向上心の芽生えは、子どもへの接し方の変化に繋がっていた。また、２年間の学びをまとめて自分自身の成長を確かめることは、就職という節目を迎える際の自信に繋がると感じた。どちらかと言えば自己肯定感の低い学生ほど、論作文をまとめるためには苦労があるが、この作業を経て得られる達成感は、社会的自立を促すために必要な作業であるといえる。

## ２　課題

### ①　保育ゼミにおける学生の専門性の向上のために

振り返りの時間が大切であるため、時間の確保が欠かせない。限られた時間のなかではあるが、時間を確保できるよう工夫をしていきたい。保育ゼミの午前中の２コマをどのように区切るか検討すること、保育観察記録やドキュメンテーシをョン作成の効率化を考えていきたい。

### ②　保育ゼミ指導者の資質の向上

学生の専門性の向上には、指導する者からの支援やアドバイスの在り方等が問われる。学生の学びの充実を図るためには、振り返りの場で出てくる問いや疑問等に、適切に答えることや､保育観察記録やドキュメンテーションへのアドバイスや評価等の在り方も大切である。学生が作成した成果物に対しては、良さを認めたり、視点の置き方を具体的にほめたりというように、保育の見方・考え方や幼児の成長のとらえ方等の良い点をしっかりと抑えて認めることが専門性の向上につながると考える。そのため、学生を指導する者も自らの保育を見る力や、学生へのアドバイスの仕方等の向上を目指していきたい。

### ③　目指す学生の姿の共有

学院内では保育ゼミの年間計画を、指導する教員間で周知して授業に取り組んでいる。一方、協力してくださっている３園でも、学生がゼミを通してこんな保育者に育っていってくれたらという思いをもってくださっているのではないかと思われる。計画段階でそこまでの話し合いをせずに取り組んできていたことに気付いた。そのため、次年度の計画を立てるにあたり、どのような姿にまで育ってほしいのかという思いやゼミでの育ちに対する期待感など、互いに出し合い、共に育てるという意識で保育ゼミを行っていけるようにしたいと考えている。単に学びの場を提供していただくことにとどまらない連携を、今後目指していきたい。これこそがコーディネーターの役割だと考える。

## おわりに

１年間を通して保育観察記録を作成し、保育を見つめ考えることによって、学生の保育実践力が高められることが実感できた。何事にも効率の良さが求められる現代社会において、地道な努力を要する取組であるが、保育者としての基礎的な資質・能力を身に付けるためには日々の丁寧な取組が大切であるということが言える。

系列３園との連携が軌道に乗った今年度は、学生の明らかな成長ぶりがとらえられ、一層の指導の充実が求められることとなっている。観察記録やドキュメンテーションといった見える成果物からとらえることのできる面だけでなく、資質・能力として内面に身に付けられていく力を育むことを念頭において、これからも計画的に取り組んでいきたいと考えている。

保育専門職を養成する本学は、今後も保育実践力の向上に向けて一層の取組を推進していく所存である。以上述べてきた取組の成果は、系列３園のご理解とご協力の賜物である。紙面をお借

りして厚く御礼申し上げるとともに、今後も一層緊密な連携と協働を推進していけるよう心よりお願い申し上げる次第である。

**参考文献**

文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説、
厚生労働省（2018）保育所保育指針解説
内閣府、文部科学省、厚生労働省（2018）幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
小学館（2020）日本版保育ドキュメンテーションのすすめ
新評論（2018）スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用
Gakken保育Books（2024）ドキュメンテーション・ポートフォリオ・保育ウェブ・対話 保育の質を支える仁慈保幼園のツールたち
西東社（2023）役立つ！活きる！保育ドキュメンテーションの作り方

# 領域「人間関係」に関する「基本的な生活習慣」についての国会質問答弁の研究

Study of the Diet question statement about "basic lifestyle" on domain "human relations"

今　井　慶　宗
Yoshimune IMAI

**要旨**

幼稚園教育要領・保育所保育指針には「基本的な生活習慣」という語が登場する。この「基本的な生活習慣」という語を手がかりに国会において幼児の特性・生活環境や幼稚園・保育所とのかかわりでどのように取り上げられているか議論を抽出した。近年では政府側から「幼児期の教育は、子供の基本的な生活習慣を形成し、道徳性の芽生えを養い、学習意欲や態度の基礎となる好奇心を養い、創造性を豊かにするなど、生涯にわたる人格形成の基礎を培う上で重要な役割を担っている」と繰り返されている。幼稚園・保育所における「基本的な生活習慣」ないし「基本的生活習慣」について、国会の本会議・委員会等において議論された内容について会議録に基づいて検討した。便宜的に、①幼児の特性・生活環境、②幼稚園教育要領・保育所保育指針、③幼稚園・保育所の教育についてそれぞれどのような議論があるかを整理し、考察した。国会における質問答弁の意義やその取り上げられ方、変遷、方向性について考察する。

Keyword：基本的生活習慣　人間関係　人間関係の指導

## Ⅰ．はじめに

幼稚園教育要領・保育所保育指針には「基本的な生活習慣」という語が登場する。この「基本的な生活習慣」について国会において幼児の特性・生活環境や幼稚園・保育所とのかかわりでどのように取り上げられているか議論を抽出し、意義やその取り上げられ方、変遷、方向性について考察する。先行研究としては、例えば安部孝「基本的生活習慣における「あいさつ」についての考察：道徳性の育成の視点として」[1)] のように、基本的生活習慣が幼児に身についているか・どのようにして身につけさせるか、というものは多数あるが、国会においてどのように議論されているかを取り上げたものは管見の限り見当たらないようである。国会の本会議・委員会等において議論された内容について公開されている会議録に基づいて検討する。

## Ⅱ．保育所保育指針における「基本的な生活習慣」の扱い

保育所保育指針は第２章「保育の内容」において「基本的な生活習慣」に関連する次のような記述がある。２「１歳以上３歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」の（２）「ねらい及び内容」のイ「人間関係」の（ア）「ねらい」では③「保育所の生活の仕方に慣れ、きまりの大切さに気付く。」、

（イ）内容では⑤「保育所の生活の仕方に慣れ、きまりがあることや、その大切さに気付く。」とされている。３「３歳以上児の保育に関するねらい及び内容」の（２）「ねらい及び内容」イ「人間関係」では（ア）「ねらい」③「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。」、（ウ）内容の取扱い④「道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、子どもが他の子どもとの関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまずきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。」とされている。

## Ⅲ．国会における質問答弁（一部要約）

### １．幼児の特性・生活環境

平成３年４月23日参議院大蔵委員会では厚生省児童家庭局企画課長が「高層住宅が乳幼児の発達に与える影響であるが、これまで建築学、小児学などの分野において学問的な研究が行われていて、発表された論文等では、一定地域の調査に基づいて高層の高密度住宅では、母親自体の外出機会が少なく母親と子供の密着度が高いために、乳幼児期の基本的な生活習慣の自立がおくれるケースがあるといった指摘がされている。また、幼児の屋外遊びの機会についても、高層高密市街地団地の場合は大規模の低密度の郊外型団地などに比べてその機会が少ないといった指摘をしているものもある。こういったことは多分に高密度の利用空間の場合に子供たちの遊び場も含めてゆとりのある生活空間の確保が難しいという事情によるものとも考えるが、厚生省としてはゆとりのある子育ての環境づくりを進めるということで進めているが、現在種々の分野で勉強を行っている段階であるので、今後とも専門家の意見がどのように展開されるのか、児童福祉の立場からも関心を持って見守りたい」と答弁している[2)]。

平成12年４月20日衆議院青少年問題に関する特別委員会では参考人（明星大学教授）が「私が最も感じたことは、親が変わったということである。親性が崩壊しつつある。臨床教育研究所が平成９年に保母456人に実施したアンケート調査によれば、保母から見た親の変化で顕著なものを列挙すると、第一に、受容とわがままの区別がつかない、第二に、基本的生活習慣を身につけさせることへの配慮が弱い、第三に、しっかり遊ばせていない、第四に、授乳や食生活にむとんちゃくである、第五に、離婚による片親家庭がふえたとなっていて、子供に食事を与えない、甘えさせない、認めてあげられない、子供を産みたくて産んだわけではないと悩む親がいる、子供をかわいく思わない親がいると保母は指摘している」と陳述している[3)]。

平成13年３月２日衆議院予算委員会第四分科会では文部科学省初等中等教育局長が「幼児期や小学校低学年の時期に、しつけなどの基本的な生活習慣とか善悪の判断、さらには社会生活上のルールなどについて、これを繰り返し指導し、その徹底を図ることが必要かつ大切なことであると考えている」と答弁している[4)]。

平成13年３月22日参議院文教科学委員会では文部科学省生涯学習政策局長が「乳幼児期は生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期である。とりわけ、すべての教育の出発点であ

る家庭教育において、基本的な生活習慣とか自制心、自律心を育成していくことが何よりも大事だろうと思っている」と答弁している[5)]。

平成17年10月19日参議院少子高齢社会に関する調査会では文部科学副大臣が「乳幼児等を持つ全国の親を対象とした家庭教育手帳の作成、配付や、家庭教育に関する学習機会の提供等に取り組んでいる。また、来年度から新たに、早寝早起きや朝食を取るなど、子供の望ましい基本的生活習慣を育成し、生活リズムを向上させるため、全国的な普及啓発活動と、地域ぐるみで子供の生活リズムを向上させることを目指すモデル事業を実施したいと考えている」と説明している[6)]。さらに質問の中で「例えば内閣府から出ているものもそうであるし、文部科学省から出ているものもそうだが、まず根本には家庭をどうする、親はどこに行っているか、そういうものがない。子供産んだらだれが育てるか。ここに書いてある子供の生活リズム向上プロジェクトチーム、早寝早起きや朝食を取ることなど、「子どもの望ましい基本的生活習慣を育成し」。だれが育成するか。人ごとである。もっともっと親に頑張れという施策が必要だと思う」という指摘がある[7)]。

平成18年３月22日参議院内閣委員会では文部科学大臣政務官が「未就学児、特に児童や幼児に関しては、その子の問題というよりは家庭の親、保護者の問題であると認識している。そういう意味では保護者のライフスタイル、状況によって子供の欠食やあるいは孤食ということを出ることのないようにしていこう。そのためにはやはりまず家庭教育である、そのためには基本的な生活習慣を打ち立てることであり、まずは食事を押さえていこうというメッセージを、より、文科省だけではなくて、国民運動に多くの人を巻き込んでいくという作戦を立てていきたい」と答弁している[8)]。

平成18年４月６日衆議院本会議では質問中で「乳幼児期は、人とかかわる力、基本的な生活習慣など、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて大切な時期であり、乳幼児期の子供の発育、発達は、その後の人生にとって大きな影響があると言われている」という指摘がある[9)]。

平成18年４月14日衆議院文部科学委員会では文部科学大臣が「子が生まれて一番身近に接するのは母、そして父、まず家庭であるから、家庭における教育、子育てが先にあると思う。連携が必要であるが、重要性という点においては、子供の健やかな育ちを支えていく基盤は家庭であろうと思っているし、親は人生最初の教師として、豊かな情操や基本的な生活習慣、社会的なマナーや自立心を養う上で重要な役割を担っていると認識している。このために、文部科学省では家庭の教育力の向上を図る観点から、家庭教育手帳の配付、乳幼児及び小中学生を持った全国の親に配付をしている。また、子育て講座の全国的な開設を行ったり、ITを活用した家庭教育支援などを実施している。また、今年度からは新たに、「早寝早起き朝ごはん」、こういった子供の生活リズムを向上させるための取り組みもスタートしている」と答弁している[10)]。

平成18年４月28日衆議院文部科学委員会では文部科学副大臣が「文部科学省としては、「早寝早起き朝ごはん」、基本的な生活習慣としての食育の重要性と、地域における食とのかかわりということを考えると、幼稚園教育とか学校教育においても、体験学習を通して、地産地消も理解しなければならない。加えて、保護者という観点からすると、乳幼児を抱えているときに、食に関する知識をしっかり持ってもらいたい」と答弁している[11)]。

平成18年６月１日参議院文教科学委員会では参考人（有限会社遊育代表取締役）が「家庭も地域社会も子供に対して本来持っていた様々な力を失ってきている。特にしつけとか基本的生活習慣を

含めて、子育て力、教育力が低下をしている」と陳述している[12)]。

平成18年６月２日衆議院教育基本法に関する特別委員会では文部科学大臣が「幼児期に受けた影響というのは、一生を通じて人間形成の中で大きな影響を持つものだと認識していて、生涯にわたる人間形成の基礎が培われるこの重要な時期に、教育はしっかりと子供の心身の健やかな成長を促す、そういう姿勢で行われなければいけない重要な意義を持っていると思う。近年、基本的な生活習慣や態度が身についていないこと、自制心や抵抗力、忍耐と言った方がよいかもしれないが、規範意識、これらが十分に育っていないことが課題として指摘もされている」と答弁している[13)]。

平成20年３月27日参議院文教科学委員会では文部科学省初等中等教育局長が「幼児期は豊かな情操や規範意識、基本的な生活習慣の基礎が培われる質の高い幼児教育が提供されることが重要であり、現在、教育基本法及び学校教育法の改正を踏まえた幼稚園教育要領の見直しを進めている」と答弁している[14)]。

平成22年10月21日参議院文教科学委員会では文部科学大臣が「人の一生において幼児期というのは、心情や意欲、態度、基本的な生活習慣など、生涯にわたり人間形成の基礎が培われる重要な時期だと認識している。私も自らの経験の中で幼稚園に通い、私の人生の中でも非常に大きな成果であったと感謝している」と答弁している[15)]。

平成24年７月18日参議院社会保障と税の一体改革に関する特別委員会では文部科学大臣が「幼児期の教育は、子供の基本的な生活習慣を育て、道徳性の芽生えを培い、学習意欲や態度の基礎となる好奇心や探求心を養い、創造性を豊かにするなど、生涯にわたる人間形成の基礎を培う上で極めて重要な役割を担っていると理解している」と答弁している[16)]。

平成29年12月１日衆議院文部科学委員会では質問の中で「幼児教育においては、基本的な生活習慣や社会性を身につけておくことは、子供の成長に大変重要なことであるだけではなくて、将来の人生のあり方を決定づけると言っても過言でない大切な時期である」という指摘がある[17)]。

平成31年３月15日衆議院内閣委員会では国務大臣（少子化対策担当）が「幼児期の教育は、子供の基本的な生活習慣を形成し、道徳性の芽生えを養い、学習意欲や態度の基礎となる好奇心を養い、創造性を豊かにするなど、生涯にわたる人格形成の基礎を培う上で重要な役割を担っている」と答弁している[18)]。

２．教育要領・保育指針

昭和46年９月９日参議院文教委員会では質問の中で「現在使われている幼稚園の教育要領の中には、「基本的生活習慣と正しい社会的態度を育成し、豊かな情操を養い、道徳性の芽ばえをつちかうようにすること。」が書いている」という指摘がある[19)]。

昭和63年12月20日参議院文教委員会では文部省初等中等教育局長が「教育課程の改訂については、昨年12月に、教育課程審議会が幼稚園から高等学校まで全体を見通した教育課程の改訂を提言した。幼稚園については昨年12月に教育課程審議会の答申があった、その答申を受けて今度は学習指導要領を具体的に決めていく作業を今していて、それはいろいろな専門家を集めて学習指導要領を告示したいということで、今鋭意最後の詰めに入っているが、今度の改訂の考え方としては基本的にはいわゆる就学前教育であるから、知識を教えることはしない。これは前と同じであるが、考え方と

しては、環境を通して行うことを幼稚園の基本とすることを明確にして、幼児期にふさわしい生活が展開されるように、あるいは遊びを通して総合的な指導が行われるように、あるいは幼児一人一人の発達の特性に応じた指導が行われるようにということを環境を通して行う教育の中でやっていきたい。今後社会が変化する。そういった変化に対応して人とかかわりを持つ力を養う、対人関係の力を育成する、あるいは自然との触れ合い、あるいは身近な環境というものに対して十分理解をする、そういったかかわり合いについて深める、あるいは基本的な生活習慣や態度を育成する、こういったことを今度の改訂の柱にしたいと思っている」と答弁している[20)]。

平成３年４月18日衆議院内閣委員会では文部省初等中等教育局幼稚園課長が「幼稚園の教育要領を新しくしたが、その中で、自然とのかかわりとか基本的生活習慣の形成の問題を重視するという方向を出したが、そういった意味においては、地域にあるいろいろな教育的な資源とか人材あるいは家庭との連携が非常に重要になってくる」と答弁している[21)]。

平成12年４月４日参議院農林水産委員会では厚生省児童家庭局長が「保育所の保育のガイドラインである保育所保育指針においても、食に関しては食事を基本的生活習慣の主要な柱として位置づけて、楽しい雰囲気の中での食事、それから偏食をしない努力、さらには体と食物の関係への関心の涵養など、それぞれの子供の発達段階に応じて指導をすることとしている」と答弁している[22)]。

平成17年３月31日参議院内閣委員会では質問の中で「幼稚園の教育要領は、基本的な生活習慣や態度を育て、健全な心身の基礎を培う。保育所の方の指針は、基本的な習慣や態度を養い、心身の基礎を培う。幼稚園の方は、人への愛情や信頼感を育て、自立、協同の態度及び道徳性の芽生えを培う。保育指針の方は、自主、協調の態度を育て、道徳性の芽生えを培う。ほとんど同じ趣旨のことが書いてある」と指摘がある[23)]。

平成18年６月６日参議院文教科学委員会では文部科学省初等中等教育局長が「認定こども園の認定基準に関する国の指針においては、教育・保育内容について、幼稚園教育要領と保育所保育指針の目標を踏まえることを基本とする予定である。具体的には、十分に養護の行き届いた環境の下で子供たちの様々な欲求を適切に満たし、生命の保持、情緒の安定を図る。健康で安全な生活のための基本的な生活習慣や態度を育てる。人とのかかわりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にする心を育てるとともに、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培う。あるいは、自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培う。さらには、言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や豊かな言葉の感覚を養う。そして、豊かな感性を育て、創造性を豊かにするといった教育、保育についての幼稚園教育要領と保育所保育指針の目標を踏まえることを基本とする予定である」と答弁している[24)]。

３．幼稚園・保育所の教育

昭和57年３月23日参議院文教委員会では文部省初等中等教育局長が「幼児期の教育は、子供の人間形成に非常に重要な影響を及ぼすものであり、幼稚園は学校教育法に基づき幼児を対象とする学校という形をとっている。安全の問題に係るしつけのようなものは当然のことであるが、健全な心身を育てて、基本的な生活習慣とか、幼児は幼児なりに一つの社会的な対応というものを啓発していく、さらには道徳性の芽生えを培うというようなことを目標にして、幼児教育としての専門的な

見地からの指導を行っている」と答弁している[25]。

昭和60年４月２日参議院文教委員会では文部省初等中等教育局長が「子供のしつけ、基本的な生活習慣、態度、そういうものを身につけさせるのには、どうしても早ければ早いほどいいと考える。大部分の子供が既に幼児教育を受ける段階に来ているので、そういう時期から子供たちのそういう面のしつけ、道徳的な態度の涵養、こういうことを進めていかなければならないと思う。ところが、残念ながら、現在の若い母達は、どうしつけしたらいいのか、何が基本的生活習慣として必要なのか、それについての非常に不安感がある。したがって、この幼稚園の事業は、まず幼稚園の教員と親がともに学習する、そして幼稚園の教員と親がともに実践をする、そしてまたともに評価をしていくというような形での事業を展開していきたい」と答弁している[26]。

昭和61年11月21日参議院決算委員会では文部省初等中等教育局長が「幼稚園教育内容のあり方については、大変大きな大事な課題として文部省としても取り組んでいる。中央教育審議会の中間まとめにおいても、教育内容のあり方、幼稚園の教育の中身の問題の指摘があったが、昭和61年９月３日に協力者会議の報告が出され、大体の方向についての内容が示されている。内容の概要について、まず一つは、幼稚園教育の基本はどうあるべきかという点である。この点は４つあり、一つは幼児の主体的な生活を中心に展開をすべきである。教育の中身は主体的な生活が中心であるべきだ、これが第一点である。第二点は、環境による教育でなければならない。第三点は、幼児一人一人の発達特性や個人差に応ずるものである必要がある。最後に第四点として、幼児の段階であるから、遊びを通した総合的な指導である必要がある。以上が幼稚園教育の基本として指摘されている。具体的な中身については、人とのかかわり、自然との触れ合いあるいは基本的な生活習慣、態度、そして、文字、数量を知識として教えるよりも、生活体験の中から興味、関心で育ててはどうか、こういう中身の指摘がある」と答弁している[27]。

平成14年11月15日衆議院内閣委員会では文部科学省初等中等教育局長が「幼稚園教育の目的は、同年代の幼児との集団生活の中で主体的な活動である遊びを通して総合的な指導を行う点にあり、その中で、発達段階に応じて基本的な生活習慣や社会性を身につけさせていく、そういうところに幼稚園教育のそもそもの目的がある」と答弁している[28]。

平成18年２月24日衆議院文部科学委員会では質問の中で「幼稚園と保育所の持っている機能を一体化することはそれほど苦労はないと考えている。なぜなら、保育所の保育目標は、年齢に応じた基本的生活習慣を身につけることであり、クラス単位の集団生活と学習をあわせて実施している保育所がほとんどで、幼稚園の教育要綱とも合わせやすいものと思うからである」という指摘がある[29]。

平成18年３月１日衆議院予算委員会第五分科会では質問の中で「現場では、保育士定数基準の年齢区分で定めている人数を下回ったとき、混合保育を実施する。学校の複式学級と違って、混合保育には限度がある。なぜなら、学校や幼稚園はクラス単位の授業をすればいいが、保育園は、各子供の発達に応じて基本的生活習慣を身につけるという、いわばマンツーマンの保育をしなければならないことがある。混合保育は保育士の力量と園児の発達ぐあいによっていろいろなクラス編制を考える」という指摘がある[30]。

平成18年４月14日衆議院文部科学委員会では質問の中で「小学校のスタート時において、保育園組と幼稚園組では、子供の生活とレベルに違いがあると考えている。保育園は、園児個人と接して、

基本的生活習慣に重点を置き、幼稚園は、クラス単位で、一定レベルの学習に重点を置いている、その特徴の差が出ているものと考える」というものがある[31]。

平成18年６月６日参議院文教科学委員会では文部科学省初等中等教育局長が「現在、特に幼稚園教育では、集団の中で直接的、具体的な体験を通じて人間形成の基礎となる心情や意欲、態度を培う教育ということになっていて、具体的には、基本的な生活習慣、態度などの生活の基盤、それから人への愛情や信頼感、道徳性の芽生えなど心の基盤、思考力の芽生え、言葉、感性、創造性などの学びの基盤をはぐくんでいくとことが一つの大きな目標であり、大切な内容になっていると考えている」と答弁している[32]。

平成19年２月28日衆議院予算委員会第五分科会では質問の中で「児童福祉法で保育所が市町村の事務として位置づけられたことにより、保育園は守りをするだけの業務ではなく、保育指針に沿った保育内容を定め、家庭を補佐して、子供たちに基本的生活習慣を身につけさすことを主眼に置き、就学までの期間、保育を受け持ってきた」というものがある[33]。

平成19年３月16日衆議院内閣委員会では内閣府特命担当大臣（規制改革）が「アンケート調査も実施した。例えば２歳児の受け入れについて、子にとって、基本的な生活習慣や自立心、思いやりが身についた、あるいは言葉などの成長が促進された、また保護者にとっては、子育て不安が解消した、あるいは選択肢が拡大してよかった、幼稚園にとっては、継続的な保育を行いやすくなった、教員の研究心が高まったというような評価がある」、文部科学省大臣官房審議官が「特区における幼稚園の２歳児の受け入れについて、幼稚園の教育が前提としている集団的な教育にはなかなかなじみにくいという面があった。一方で、基本的な生活習慣や自立心が身につくなどの子供の成長が見られたり、親の育児不安軽減の効果があるという積極的な評価があった」とそれぞれ答弁している[34]。

平成28年３月31日参議院内閣委員会では「保育施設、保育園、この保育園は誰のためにあるものか」という質問があり内閣府特命担当大臣（少子化対策）は「２つの要素があり、一番大事なことは、我が国の将来を担う子供に対して、まさに大変、人間形成にとって極めて重要な時期に、いわゆる養護、子供の生命の保持及び情緒の安定を図るために行う援助や関わりをベースとして、教育、すなわち子供の発展過程に応じて基本的な生活習慣、愛情と信頼感、協調性、道徳性、興味や関心、豊かな感性や思考力、表現力を養うため発達支援を行うものである。他方で、働く人が育児と働き方を両立する、それを支援する、そういう機能も当然担っている」と答弁している[35]。

## Ⅳ．考察

幼児教育・保育において「基本的生活習慣」ないし「基本的な生活習慣」という語が取り上げられ質問答弁がなされるようになったのは昭和40年代半ばからのようである。幼稚園教育要領・保育所保育指針との関連で取り上げられることもあるし、より直接的に幼児の発達や教育との関係で取り上げられることもある。ただし、国会において取り上げられる頻度は高いとは言い難い。

国会における質問答弁で幼児の「基本的生活習慣」という語が最も早く登場するのは昭和46年９月９日参議院文教委員会の質問であり、当時の幼稚園教育要領の中に「基本的生活習慣と正しい社会的態度を育成し、豊かな情操を養い、道徳性の芽ばえをつちかうようにすること」が示されてい

るというものである。約50年前である。

幼児の特性・生活環境に関しては、平成３年４月23日参議院大蔵委員会において厚生省児童家庭局企画課長が高層住宅が乳幼児の発達に与える影響について発表された論文等に「高層の高密度住宅では、母親自体の外出機会が少なく母親と子供の密着度が高いために、乳幼児期の基本的な生活習慣の自立がおくれるケースがある」という指摘があることを示している。

乳幼児の親の変化を指摘するものとして平成12年４月20日衆議院青少年問題に関する特別委員会の参考人（明星大学教授）陳述があり「基本的生活習慣を身につけさせることへの配慮が弱い」としている。これについて平成13年３月２日衆議院予算委員会第四分科会で文部科学省初等中等教育局長が「幼児期や小学校低学年の時期に、しつけなどの基本的な生活習慣」等を「繰り返し指導し、その徹底を図ることが必要かつ大切なことである」としている。平成20年３月27日参議院文教科学委員会でも文部科学省初等中等教育局長が「幼児期は豊かな情操や規範意識、基本的な生活習慣の基礎が培われる質の高い幼児教育が提供されることが重要」としている。

基本的生活習慣を身に付ける意義として平成29年12月１日衆議院文部科学委員会の質問では「子供の成長に大変重要なことである」にとどまらず「将来の人生のあり方を決定づける」と指摘している。

平成31年３月15日衆議院内閣委員会以降「幼児期の教育は、子供の基本的な生活習慣を形成し、道徳性の芽生えを養い、学習意欲や態度の基礎となる好奇心を養い、創造性を豊かにするなど、生涯にわたる人格形成の基礎を培う上で重要な役割を担っている」ということが繰り返し政府側から答弁されていることも注目に値する。

幼稚園教育要領の中での「基本的な生活習慣」については昭和63年12月20日参議院文教委員会でも登場している。ここで文部省初等中等教育局長が教育課程の改訂について「基本的な生活習慣や態度を育成する」こともこのときの改訂の柱にしたいとしている。この幼稚園教育要領改訂については平成３年４月18日衆議院内閣委員会でも文部省初等中等教育局幼稚園課長が「自然とのかかわりとか基本的生活習慣の形成の問題を重視するという方向を出した」としている。このことについて平成３年４月18日衆議院内閣委員会で文部省初等中等教育局幼稚園課長が「自然とのかかわりとか基本的生活習慣の形成の問題を重視するという方向を出した」ことについて「地域にあるいろいろな教育的な資源とか人材あるいは家庭との連携が非常に重要」としている。平成14年11月15日衆議院内閣委員会でも文部科学省初等中等教育局長が幼稚園教育の目的について「同年代の幼児との集団生活の中で主体的な活動である遊びを通して総合的な指導を」行い「その中で、発達段階に応じて基本的な生活習慣や社会性を身につけさせていく」としている。

保育所保育指針は平成12年４月に第２次改定が施行されているが平成12年４月４日参議院農林水産委員会で厚生省児童家庭局長が「食に関しては食事を基本的生活習慣の主要な柱として位置づけて」いることを答弁している。平成17年３月31日参議院内閣委員会でも質問中においても「（幼稚園の教育要領は）基本的な生活習慣や態度を育て、健全な心身の基礎を培う」「（保育所保育指針は）基本的な習慣や態度を養い、心身の基礎を培う」旨の規定があることが指摘されている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領についても平成18年６月６日参議院文教科学委員会で文部科学省初等中等教育局長が「幼稚園教育要領と保育所保育指針の目標を踏まえることを基本とする予定」で

「健康で安全な生活のための基本的な生活習慣や態度を育てる」こととすることを答弁している。

平成18年２月24日衆議院文部科学委員会の質問で幼保一元化の文脈で「保育所の保育目標は、年齢に応じた基本的生活習慣を身につけることであり」「幼稚園の教育要綱とも合わせやすい」という指摘がある。一方で平成18年４月14日衆議院文部科学委員会の質問においては「保育園は、園児個人と接して、基本的生活習慣に重点を置き、幼稚園は、クラス単位で、一定レベルの学習に重点を置いている」とし就学時点において「子供の生活とレベルに違いがある」ことが指摘されている。平成18年６月６日参議院文教科学委員会では文部科学省初等中等教育局長が「（幼稚園教育では）基本的な生活習慣、態度などの生活の基盤」をはぐくんでいくとことが目標であるとしている。平成18年３月１日衆議院予算委員会第五分科会の質問では「保育園は、各子供の発達に応じて基本的生活習慣を身につけるという、いわばマンツーマンの保育をしなければならない」から混合保育には限界があるという指摘がある。

平成19年２月28日衆議院予算委員会第五分科会でも「保育園は守りをするだけの業務ではなく、保育指針に沿った保育内容を定め、家庭を補佐して、子供たちに基本的生活習慣を身につけさすことを主眼に置き」保育を受け持っていることを指摘しているものがある。

基本的な生活習慣の習得は早期に行うべきであると政府側が考えていることが分かるのが昭和60年４月２日参議院文教委員会での文部省初等中等教育局長答弁であり「子供のしつけ、基本的な生活習慣」を「身につけさせるのには、どうしても早ければ早いほどいい」、「幼児教育を受ける段階」の「時期から子供たちのそういう面のしつけ、道徳的な態度の涵養」を進めていかなければならない、としている。

平成19年３月16日衆議院内閣委員会では内閣府特命担当大臣（規制改革）が「特区における幼稚園の２歳児の受け入れ」について文部科学省大臣官房審議官が答弁する中で「基本的な生活習慣や自立心が身につくなどの子供の成長」が見られるという積極的な評価があったことを述べている。

近年でも平成28年３月31日会参議院内閣委員会でも「保育施設、保育園」は「誰のためにあるものか」という質問に対する答弁として内閣府特命担当大臣（少子化対策）が２つの要素のうちの１つとして「すなわち子供の発展過程に応じて基本的な生活習慣」等を「養うため発達支援を行うものである」としている。

## Ⅴ．まとめ

幼稚園・保育所における「基本的な生活習慣」ないし「基本的生活習慣」について、国会の本会議・委員会等において議論された内容について会議録に基づいて検討した。便宜的に、①幼児の特性・生活環境、②幼稚園教育要領・保育所保育指針、③幼稚園・保育所の教育についてそれぞれどのような議論があるかを整理し考察した。

基本的に、政府側も議員も基本的な生活習慣の習得は早期に行うべきであると考えていることがわかる。幼稚園・保育所における「基本的な生活習慣」ないし「基本的生活習慣」について、国会において議論される頻度は限られているが幼稚園教育要領・保育所保育指針にも影響を与えるものであり、今後ともその方向性について検討することは重要であると考える。

## 注

1）安部孝「基本的生活習慣における「あいさつ」についての考察：道徳性の育成の視点として」名古屋芸術大学研究紀要42・pp.1 ～ 14（2021）
2）平成３年４月23日第120回国会参議院大蔵委員会会議録第10号p36
3）平成12年４月20日第147回国会衆議院青少年問題に関する特別委員会会議録第６号p 1
4）平成13年３月２日第151回国会衆議院予算委員会第四分科会会議録第２号p14
5）平成13年３月22日第151回国会参議院文教科学委員会会議録第３号p 2
6）平成17年10月19日第163回国会参議院少子高齢社会に関する調査会会議録第１号p 2
7）平成17年10月19日第163回国会参議院少子高齢社会に関する調査会会議録第１号p14
8）平成18年３月22日第164回国会参議院内閣委員会会議録第４号p28
9）平成18年４月６日第164回国会衆議院本会会議録第20号p19
10）平成18年４月14日第164回国会衆議院文部科学委員会会議録第13号p 5
11）平成18年４月28日第164回国会衆議院文部科学委員会会議録第16号p20
12）平成18年６月１日第164回国会参議院文教科学委員会会議録第15号p 4
13）平成18年６月２日第164回国会衆議院教育基本法に関する特別委員会会議録第８号p39
14）平成20年３月27日第169回国会参議院文教科学委員会会議録第３号p17
15）平成22年10月21日第176回国会参議院文教科学委員会会議録第２号p 2
16）平成24年７月18日第180回国会参議院社会保障と税の一体改革に関する特別委員会会議録第３号p44
17）平成29年12月１日第195回国会衆議院文部科学委員会会議録第３号p25
18）平成31年３月15日第198回国会衆議院内閣委員会会議録第６号p17（平成31年３月28日第198回国会衆議院内閣委員会文部科学委員会厚生労働委員会連合審査会会議録第１号p19での国務大臣（少子化対策担当）答弁、平成31年４月25日第198回国会参議院内閣委員会文教科学委員会厚生労働委員会連合審査会会議録第１号p 1での文部科学大臣答弁、令和元年５月９日第198回国会参議院内閣委員会会議録第14号p 9での内閣府子ども・子育て本部統括官答弁、令和２年２月25日第201回国会衆議院予算委員会第四分科会会議録第１号p30での文部科学省初等中等教育局答弁も同旨）
19）昭和46年９月９日第66回国会参議院文教委員会閉会後会議録第２号p25
20）昭和63年12月20日第113回国会参議院文教委員会会議録第12号p17
21）平成３年４月18日第120回国会衆議院内閣委員会会議録第９号p29
22）平成12年４月４日第147回国会参議院農林水産委員会会議録第８号p 6
23）平成17年３月31日第162回国会参議院内閣委員会会議録第５号p16
24）平成18年６月６日第164回国会参議院文教科学委員会会議録第16号p 5
25）昭和57年３月23日第96回国会参議院文教委員会会議録第３号p28
26）昭和60年４月２日第102回国会参議院文教委員会会議録第４号p22
27）昭和61年11月21日第107回国会参議院決算委員会会議録第２号p15
28）平成14年11月15日第155回国会衆議院内閣委員会会議録第７号p20

29）平成18年２月24日第164回国会衆議院文部科学委員会会議録第２号p ９
30）平成18年３月１日第164回国会衆議院予算委員会第五分科会会議録第２号p36
31）平成18年４月14日第164回国会衆議院文部科学委員会会議録第13号p ３
32）平成18年６月６日第164回国会参議院文教科学委員会会議録第16号p24
33）平成19年２月28日第166回国会衆議院予算委員会第五分科会会議録第１号p18
34）平成19年３月16日第166回国会衆議院内閣委員会会議録第５号p ２
35）平成28年３月31日第190回国会参議院内閣委員会会議録第７号p １

## 参考文献

・安部孝「基本的生活習慣における「あいさつ」についての考察：道徳性の育成の視点として」名古屋芸術大学研究紀要42・pp.1 ～ 14（2021）

# 乳幼児期における新しい時代の運動会に向けた今後の課題
## ― N市等の現状を踏まえて ―

Future Challenges for Early Childhood Sports Days in a New Era
- Analyzing about Current Situation of Sports Days in N.-City etc -

杉 本 睦 洸 ・ 森　むつみ ・ 山 村 康 子
Nobuhiro SUGIMOTO, Mutsumi MORI & Yasuko YAMAMURA

**要旨**

本研究は、運動会の本来の意義や現状を踏まえたうえで新しい時代の運動会の課題を明らかにする目的で行われた。N県及びK府O府の公私立の幼稚園・保育園・認定こども園を対象とした郵送による調査を実施し、20園82名の有効回答の運動会の達成度の統計的分析と全回答の自由記述の分析、および同法人系列の運動会前後の観察を行った。その結果、次の５点を明らかにした。①運動会は運動能力だけではない総合的な価値があることを今後も忘れてはならない、②子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性に関する経験もできるようなプロセスを工夫すること、③乳児の運動会に関しては､特に身体表現プログラムにおいて固定的ではない柔軟な捉え方が必要であること、④熱中症対策を万全に講じながら行う必要があること、⑤感染症対策を講じた運動会における変化や工夫をふまえることで得た本来の運動会の在り方を意識化し、それと運動会で何を子どもに経験させたいか学ばせたいかという園の目標などの多側面とがマッチしていく部分を発見すること。

**キーワード**：運動会　乳幼児期　身体表現

### 1．はじめに

2023年５月、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が２類相当から５類感染症に移行され、以前の生活が戻りつつある。それに伴い乳幼児の保育・教育の場である各種園所の行事の中で、一度途切れたものを元に戻して踏襲していく行事もあるが、特別に一考が必要な行事もあり、その一つとして「運動会」をあげられるのではないか。

箕和（2017）によると、日本初の運動会は、1874年（明治７年)、東京・築地の海軍兵学校で開催された競闘遊戯会であった。運動会はその始まりの時期において、身体を訓練する行事でありながら、家庭や地域とのつながりのなかにある文化的行事でもあった。それは地域的な生活世界においての村祭りとしての機能を持っており、運動会には多くの地域住民が見物に訪れていたという。現在でもこのような感覚の中で運動会が行われており、家庭や地域においての年中行事として色濃く残っていると言えよう。

柴崎（1992,1993）によると、幼稚園の運動会の起源は明治中期にあった。また明治時代の保育日誌の記述から「この頃の運動会は、遠足と運動遊びを合わせたようなものであり、軍隊式の行軍

と競技を行うことにより意識の高揚を図るという意味合いがあったようです」と述べている。実際に運動会において入退場の行進はコロナ禍の前ぐらいまでは、各学校・園などでも行われていた。

箕和（2017）は、明治30年代から地域の行事としての連合運動会が盛んに開催されるようになると、園児たちも地域の運動会に参加して慣習の前で遊戯をするようになり、いわゆる見せる運動会に変わっていったと述べている。

運動会の価値や意義に関しての変化として、柴崎（1992,1993）は、昭和初期には幼稚園の運動会は幼稚園独自での運動会を行い始め、大規模な運動会に参加して観てもらうより、規模は小さくても自分たちで無理なく自然に楽しめる運動会にしたいという努力が払われるようになったと指摘している。さらに箕和（2017）は、近年、保育時間の長時間化や、幼稚園の認定こども園化などに伴い、幼児にふさわしい経験としての行事の見直しを実施するような園や自治体も増えてきているため、東京の小金井市では、今から30年以上前から「行事っていったい何だろう。いったい誰のためのものなのだろう」と毎年のように行事の見直しを行っていると述べている。

岡澤（2023）は、子ども主体の保育の質の向上のためには、コロナ禍における運動会の実態を振り返り、運動会が何のためにあるのか根本的な模索が必要であること、さらに運動会のその日一日が活動の頂点として終わってしまわないように、日常の保育とのつながりの中で子ども達の学びの援助を続けることが必要な課題であることを明らかにしている。例えば、各園での運動会の身体表現プログラムの実施も、何のためにあるのか、日常の保育とのつながりをどのようにとらえるべきなのかなどの演目や方法に関する課題も残されているといえよう。

さらに近年、国連事務総長が「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した」と発言（国連広報センター,2023）したように世界の平均気温は上昇している。日本においても100年で1.35°も上昇している（気象庁,2024）。特に1990年代以降に高温になる年が多くなってきており、今後さらに高温になると予測されている。この事態は運動会の開催時期の選択や運営等に関して影響があると考えられる。

そこで本研究は、運動会の本来の意義や現状を踏まえたうえで新しい時代の運動会の課題を明らかにする目的で行った。

## ２．方法

### １）調査対象

N県及びK府O府の公私立の26園所に、調査用紙146部を郵送にて依頼し回答を郵送にて回収した。回収数は96件であった。そのうち運動会を実施した担当クラスの回答82件を本研究の有効数とした。

表１　有効回答であった園所数内訳

| | 幼稚園 | こども園 | 保育園 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 回収数 | 13 | 65 | 18 | 96 |
| 回収数のうち運動会実施クラス | 12 | 57 | 13 | 82 |

### ２）調査項目

#### （１）基本情報の質問項目

①所属園種：幼稚園・こども園・保育所（園）

②担当クラス：０歳児・１歳児・２歳児・３歳児
４歳児・５歳児・異年齢児（乳児・幼児）
③2024年度運動会の実施の有無
④運動会の実施場所（園庭・園ホール・小学校・地域）
⑤運動会の実施時期（１学期または２学期）

**（２）今年度の運動会を振り返っての15項目の設問**

設問項目を表２に示した。回答方法は、４点「非常にあてはまる」・３点「ややあてはまる」・２点「あまりあてはまらない」・１点「全くあてはまらない」の４件法での回答とした。

表２　設問の内容

| | |
|---|---|
| 1 | 自分の体を十分に動かそうとする意欲を持てた |
| 2 | 取り組む中で自分の考えや思いを言葉にして伝えることができた |
| 3 | 練習を重ねることでできることが増え、達成感をあじわうことができた |
| 4 | 身近な大人とふれあうことで信頼関係を深めることができた |
| 5 | 練習してきたことを人前で発表する経験ができた |
| 6 | 親子種目を通して、一緒に身体を動かしふれあいを楽しめた |
| 7 | のびのびと体を動かし、運動することを楽しめた |
| 8 | 様々な競技や種目を通して、喜びや悔しさなどいろいろな感情を経験できた |
| 9 | 競技や表現に挑戦したり、成功をしたりすることで自信をつけることができた |
| 10 | 友だちと力をあわせたり応援したりすることで協力する気持ちをあじわうことができた |
| 11 | 異年齢間の交流が運動会前後にも深まった |
| 12 | 子どもたちの主体性を尊重することができた |
| 13 | 保護者に子どもの成長を感じられる機会の場を設けることができた |
| 14 | 運動会で経験したことを言葉や絵で表現することにもつながった |
| 15 | 保育者間で運動会のねらいについて話し合うことで協働性や同僚性が深まった |

**（３）自由記述の項目**

①身体表現のプログラムのねらいと内容・使用した曲・曲を選んだ理由・使用した道具等
②運動会の開催にあたり大変だと感じること及び課題と思う事２点
③コロナウィルス感染症の制限期間以前と制限解除後の運動会の運営や開催に関して変化した点、工夫した点

**３）調査時期**：2025年１月

**４）観察対象及び観察時期**

本学院の付属幼稚園、および同法人系列保育園、こども園の運動会の事前の練習や事後、そして当日における、2024年９月～11月の間、全体の園児たちの様子を観察記録した。

記録のポイントは、運動会に向けて過ごす子どもたちの姿、演目・競技の練習の持ち方、保育者の関わりや指導、子どもたちの様子、運動会後の子どもたちの変化とした。

**５）統計処理**：データ分析はIBM SPSS Statistics ver.28.0.1.0（142）を使用した。

## ３．結果と考察

### １）設問間の比較

t 検定を用い、15項目を関連する領域別に分けその平均得点で比較した。１・３・７・９番を領域「健康」、４・６・10・11番を領域「人間関係」、８番を領域「環境」、２番を領域「言葉」、５・14番を領域「表現」とした。12・13・15番は領域外の項目として設定していたため個別の t 検定を行った。図１は領域別の得点平均である。

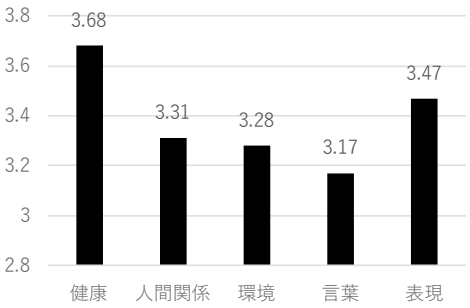



**図１　領域別得点平均**

**表３　得点の t 検定**

| | 平均の差 | 標準偏差 | t 値 | 自由度 | 有意確率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 健康 - 人間関係 | 0.4 | 0.4 | 8.2 | 81 | 0.000 |
| 健康 - 環境 | 0.4 | 0.6 | 5.8 | 81 | 0.000 |
| 健康 - 言葉 | 0.5 | 0.6 | 8.0 | 81 | 0.000 |
| 健康 - 表現 | 0.2 | 0.4 | 4.7 | 81 | 0.000 |
| 人間関係 - 環境 | 0.0 | 0.7 | 0.4 | 81 | 0.695 |
| 人間関係 - 言葉 | 0.1 | 0.6 | 2.0 | 81 | 0.054 |
| 人間関係 - 表現 | -0.2 | 0.5 | -2.9 | 81 | 0.005 |
| 環境 - 言葉 | 0.1 | 0.8 | 1.3 | 81 | 0.191 |
| 環境 - 表現 | -0.2 | 0.6 | -2.9 | 81 | 0.005 |
| 言葉 - 表現 | -0.3 | 0.6 | -4.5 | 81 | 0.000 |
| 設問 12 - 設問 13 | -0.5 | 0.6 | -7.1 | 81 | 0.000 |
| 設問 12 - 設問 15 | -0.2 | 0.6 | -3.1 | 81 | 0.003 |
| 設問 13 - 設問 15 | 0.3 | 0.6 | 5.1 | 81 | 0.000 |

領域「健康」のねらいの達成度は、他のすべての領域と有意差があった。したがって「健康」領域の達成度は他の領域の達成度よりも高かったといえる（表３）。また、領域「表現」のねらいの達成度も他のすべての領域と有意差があった。領域「表現」の達成度は領域「健康」の達成度よりも低かったが､領域「人間関係」「環境」「言葉」のねらいの達成度よりも高かったといえる（表３）。

これらの結果から、運動会では領域「健康」のねらいが最も多く達成されたことがわかった。本研究で設定した健康の領域の設問は、運動と意欲・達成感・楽しさ・自信との関係であった。それらの内容は、非認知能力につながる経験であり、運動会の行事としての価値が確認されたといえよう。

また、設問12は「子どもの主体性の尊重をした」について、設問13は「保護者にとって子どもの成長を見る場になった」か、設問15は「保育者同士の協働性や同僚性を深めた」についての内容である。表３に示す通り、設問12（平均値3.28）と設問15（平均値3.47），設問13（平均値3.80）と設

問15（平均値3.47）には有意差があった。したがって、「子どもの主体性の尊重をした」よりも「保護者にとって子どもの成長を見る場になった」方の得点が高いといえる。さらに「保育者同士の協働性や同僚性を深めた」よりも「保護者にとって子どもの成長を見る場となった」方の得点が高いといえる。すなわち、子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性よりも、保護者が子どもの成長を見る機会になったとの回答が多く、運動会の「見せる」面での価値をより意識していると考えられる。それを裏付けることとして、領域「表現」の達成度が、領域「人間関係」「環境」「言葉」のねらいの達成度よりも高かったことがあげられる。すなわち、運動会における身体表現プログラムは、演じる子ども達にとっても、観ている保護者や地域の方たちにとっても、成長を感じられる機会としてとらえられているのではないかと考えられる。領域「表現」については、後述する自由記述の中でさらに詳しく分析する。

**２）園種の違いによる比較**

一要因分散分析（３水準）により園種別の平均値の比較を行った。その結果、表４に示す通り、設問６「親子種目を通して、一緒に身体を動かしふれあいを楽しめた」は園種の効果が有意であったＦ（2,4.862）＝6.602,p＜.05)。多重比較によれば、幼稚園と保育園の間と、こども園と保育園の間に有意差があった。しかしながら幼稚園とこども園の間は有意ではなかった（表５）。すなわち、保育園では他の園種より親子の交流ができていたと捉えていたことが分かった。

また、表６に示す通り、設問10「友だちと力を合わせたり応援したりすることで自信をつけることができた」は園種の効果が有意であった（Ｆ（2,2.451）＝3.690,p＜.05)。多重比較によれば、幼稚園とこども園の間に有意差があった（表７)。すなわち、幼稚園では友達同士の関わり合いから自信をつけていると捉えていることが分かった。

これらの結果から、園種によって運動会における領域「人間関係」の達成内容が異なることが分かった。保育園の子どもは園で過ごす時間が長いため、普段の生活の中でのふれあいの時間をおぎなうという意味から、運動会という特別な機会において子どもと保護者がふれ合い、関わり合えるような時間や機会を設けられるような種目が用意されていると考えられる。一方、幼稚園は年齢が高いため友だち同士で力を合わせ、考え作り上げていく種目・演目もあり、発表の場として練習してきた姿を披露する場となっていると考えられる。園種の状況に合わせて、運動会の人間関係のねらいを工夫し、大事にしていることが分かった。

**表４　設問６のデータ表示**

| | 幼稚園 | こども園 | 保育園 |
|---|---|---|---|
| 平均値 | 2.70 | 3.54 | 4.00 |
| 度数 | 10 | 52 | 13 |
| 標準偏差 | 1.49 | 0.80 | 0.00 |

**表５　設問６の多重比較の結果**

| | 幼稚園 | こども園 | 保育園 |
|---|---|---|---|
| 幼稚園 | | ＜ | ＜ |
| こども園 | | | ＜ |
| 保育園 | | | |

不等号 p<.05

表６　設問10のデータ表示

| | こども園 | 保育園 | 幼稚園 |
|---|---|---|---|
| 平均値 | 3.16 | 3.46 | 3.83 |
| 度数 | 12 | 13 | 57 |
| 標準偏差 | 0.39 | 0.88 | 0.86 |

表７　設問10の多重比較の結果

| | こども園 | 保育園 | 幼稚園 |
|---|---|---|---|
| こども園 | | ＝ | ＜ |
| 保育園 | | | ＝ |
| 幼稚園 | | | |

不等号 p<.05　等号 n.s.

### ３）担当クラスの年齢による比較

異年齢児の乳児と０歳児・１歳児・２歳児を「乳児」、３歳児・４歳児・５歳児を「幼児」として、得点の平均のｔ検定を行った。領域「人間関係」以外の４領域において有意差があった（表８～11）。４領域とも「幼児」の方が高い得点であったといえる。設問12.13.15には年齢別の有意差はなかった。

これらの結果から、設問４（身近な大人とふれあい信頼関係を深める）や設問６（一緒に身体を動かしふれあいを楽しむ）といった「人間関係」に関する運動会のねらいは、乳児と幼児に変わりがないことが分かった。「人間関係」以外の４領域では、その領域に関しての質問が設問９（競技や表現に挑戦）や設問８（いろいろな感情を経験）設問２（自分の考えや思いを言葉にして伝える）設問14（経験したことを言葉や絵で表現）といった内容であったため、乳児期よりも幼児期の方がこれらの内容において達成されたことがわかりやすい年齢であることから、幼児の方が高い得点となったと考えられる。このことから、本研究の設問内容が乳児から幼児にわたり、偏りがない設問内容ではなかったのではないかと考えられる。

表８　担当クラスの年齢による比較「健康」
領域「健康」のｔ検定

| | 乳児 | 幼児 |
|---|---|---|
| 平均 | 3.68 | 3.82 |
| 分散 | 0.16 | 0.07 |
| 自由度 | 120.00 | |
| t | -2.13 | |
| 有意確率 | 0.03 | |

表９　担当クラスの年齢による比較「環境」
領域「環境」のｔ検定

| | 乳児 | 幼児 |
|---|---|---|
| 平均 | 3.29 | 3.60 |
| 分散 | 0.66 | 0.29 |
| 自由度 | 120.00 | |
| t | -2.35 | |
| 有意確率 | 0.02 | |

表10　担当クラスの年齢による比較「言葉」
領域「言葉」のｔ検定

| | 乳児 | 幼児 |
|---|---|---|
| 平均 | 3.18 | 3.38 |
| 分散 | 0.54 | 0.32 |
| 自由度 | 120.00 | |
| t | -1.61 | |
| 有意確率 | 0.11 | |

表11　担当クラスの年齢による比較「表現」
領域「表現」のｔ検定

| | 乳児 | 幼児 |
|---|---|---|
| 平均 | 3.46 | 3.69 |
| 分散 | 0.33 | 0.11 |
| 自由度 | 120.00 | |
| t | -2.57 | |
| 有意確率 | 0.01 | |

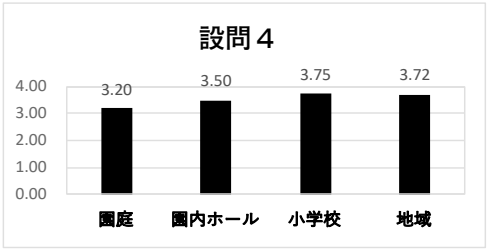
### ４）運動会の実施場所による比較

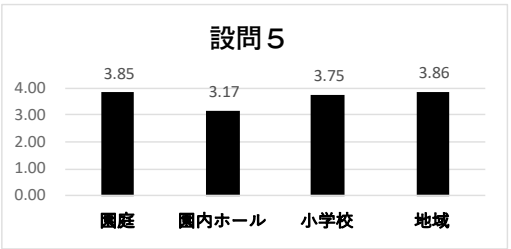
運動会の実施場所の回答から、園庭･園内ホール･小学校（グランドや体育館）･地域（グランド･体育館・公園）の４カ所に分け、一要因分散分析（４水準）を行った。その結果、表12に示す通り５つの設問に有意差があった。それらの設問の基本データ図２に示した。

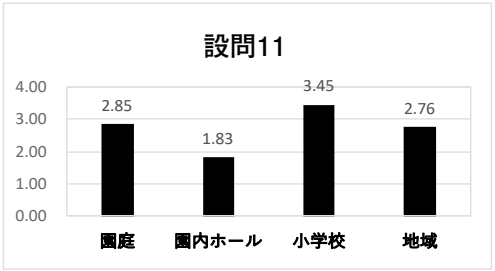
表12　運動会の実施場所による一要因分散分析

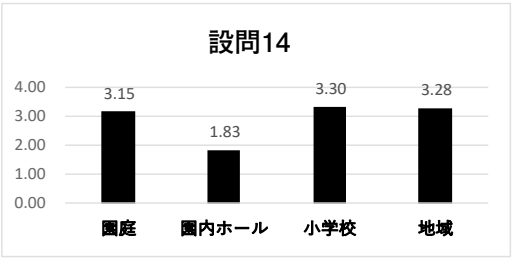
| 設問 | 自由度 | 平方和 | F値 | 有意確率 |
|---|---|---|---|---|
| 設問４　身近な大人とふれあい信頼関係を深める | 3 | 5.35 | 6.60 | 0.00 |
| 設問11　異年齢交流の深まり | 3 | 14.20 | 7.59 | 0.00 |
| 設問８　様々な競技や種目を通した様々な感情の経験 | 3 | 6.53 | 3.81 | 0.01 |
| 設問５　練習してきたことを人前で発表する経験 | 3 | 2.58 | 3.07 | 0.03 |
| 設問14　運動会の経験を言葉や絵での表現につながる | 3 | 11.87 | 8.17 | 0.00 |

p<.05



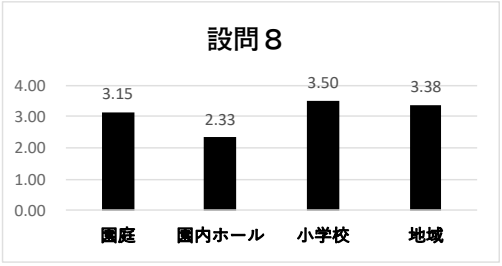




図２　運動会の実施場所による得点比較

LSD法を用いた多重比較の結果を表13に示した。

表13　運動会の実施場所による多重比較

| 設問 | | 場所 | 園庭 | 園内ホール | 小学校 | 地域 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 領域「人間関係」 | 設問４ | 園庭 | | | ＜ | ＜ |
| | | 園内ホール | | | | |
| | | 小学校 | | | | |
| | | 地域 | | | | |
| | 設問11 | 園庭 | | ＞ | ＜ | |
| | | 園内ホール | | | ＜ | ＜ |
| | | 小学校 | | | | ＞ |
| | | 地域 | | | | |
| 領域「環境」 | 設問８ | 園庭 | | ＞ | | |
| | | 園内ホール | | | ＜ | ＜ |
| | | 小学校 | | | | |
| | | 地域 | | | | |
| 領域「表現」 | 設問５ | 園庭 | | ＞ | | |
| | | 園内ホール | | | ＜ | ＜ |
| | | 小学校 | | | | |
| | | 地域 | | | | |
| | 設問14 | 園庭 | | ＞ | | |
| | | 園内ホール | | | ＜ | ＜ |
| | | 小学校 | | | | |
| | | 地域 | | | | |
| | | | | 不等号p<.05　空欄はn.s. | | |

設問４（身近な大人とふれあい信頼関係を深める）では、園庭よりも小学校や地域での実施の得点が高かったといえる。

設問11（異年齢交流の深まり）では、園内ホールよりも園庭、小学校、地域での実施の得点が高く、地域よりも小学校の実施の得点が高かったといえる。

設問８（様々な競技や種目を通した様々な感情の経験）や設問５（練習してきたことを人前で発表する経験）及び設問14（運動会の経験を言葉や絵での表現につながる）では、園内ホールよりも園庭、小学校、地域での実施の得点が高かったといえる。

これらの結果から、より広い場所での実施が、人とのふれあいや交流を深め、様々な競技内容を経験でき、その後のあそびや学びにつながっていたことが分かった。交流種目や親子競技プログラムの実施、のびのびとした配置での競技や準備、保護者等の見学席確保等、より広いところで行う

ことが運営もスムーズに行えると考えられる。実際は自園の園庭の広さや園児数、保育者数、地域との連携の在り方なども理解しながらの運営になり、できる範囲の中での運動会にならざるを得ない。しかしながら､その中でも運動会という行事をその日一日のイベントとして考えるのではなく、運動会で何を子どもに経験させたいか、学ばせたいかという園の目標を意識することが最重要視される必要があるのではないかと考える。

### ５）運動会の開催時期別の比較

運動会の開催時期別に、各領域の回答得点のｔ検定を行った。その結果、開催時期の間には有意差はなかった。開催時期については、後述する自由記述の中で天候との関係から分析をする。

### ６）自由記述の分類

（１）質問Ⅲ自由記述欄の分類

「身体表現のプログラムの有無」について乳児と幼児別の回答数を表14に示した。

表14　身体表現プログラムの有無

| | 乳児 | | | 幼児 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 0歳児 | 1歳児 | 2歳児 | 3歳児 | 4歳児 | 5歳児 | 計 |
| あり | 2 | 5 | 8 | 12 | 17 | 16 | 60 |
| なし | 3 | 2 | 5 | 2 | 3 | 3 | 18 |
| 未回答 | | | | | | | 4 |
| | | | | | | 合計 | 82 |

表14から、乳児クラスと幼児クラスを比べてみると、幼児クラスではほとんどのクラスに身体表現プログラムがあるのに対し、乳児クラスは少なくなっている。乳児クラスは、広い場所での運動会ではなく、参観などの別の機会で行うこともある。また、歩行できない年齢であるので身体表現ができないと捉えている回答もあった。「身体」を上手に動かせなければ身体表現プログラムはできないのではないかと身体表現のイメージを固定化しないで、乳児の身体表現プログラムも充実させていく必要がある。

次に、「身体表現のプログラムのねらいと内容・使用した曲・曲を選んだ理由・使用した道具等」について分析を行い表15に示した。

表15　身体表現のプログラムの乳児と幼児の比較

設問１．どのようなねらいでどういった内容をされていますか。

設問２．どのような音楽を使われていますか。使われた曲名を教えてください

設問３．なぜこの曲を選ばれたのですか。

設問４．表現する際に使用した道具があればご記入ください例）ポンポン・バルーン・鳴子など

| | **乳児　0,1,2歳児**　14の回答中、複数回答あり | 回答数 | **幼児　3,4,5歳児**　44の回答中、複数回答あり | 回答数 |
|---|---|---|---|---|
| 設問1. | ①親子との触れ合いを楽しむ | 7 | ①友だちと力を合わせる | 24 |
| | ②全身を動かして楽しむ | 3 | ②体を動かすことを楽しむ | 16 |
| 設問2. | 同じ曲はなし | | 最高到達点 | 5 |
| 設問3. | 子ども達の好きな曲、親しみのある曲だから | 5 | 子ども達の好きな曲、馴染みのある曲だから | 10 |
| 設問4. | なし | 7 | ①バルーン | 16 |
| | | | ②リストバンド | 8 |
| 曲のテンポ | 平均♩≒133 | | 平均♩≒122 | |
| 曲の調 | ヘ長調 | 7 | ニ長調 | 10 |

身体表現プログラムのねらいについて、乳児クラスでは親子との触れ合いを大切にし、体を動かすことを共に楽しむという記述が多かった。また幼児クラスでは友だちと力を合わせる、協調性を育むことをねらいとする記述が多かった。

曲の平均テンポについては乳児♩＝133幼児♩＝122であり、乳児の方が平均のテンポが速かった。乳児の平均テンポが速いのは、速いテンポの方が刺激があり、速いので逆にテンポやリズムに応じるのではなく、感覚に任せて自由に動けるからなのではないかと思われる。感覚で動く乳児の身体の特徴を意識できていると思われる。

幼児のプログラムに多く使用されている曲の♩＝126のテンポは、♩＝120のマーチテンポ（歩きながら演奏する行進に合わせて、規則的なリズムと楽節構造を持ち、通常２拍子または４拍子のテンポ）に近い。幼児になると、音楽に合わせてリズムを取ったり、音楽に合わせて表現したりすることができるため、歩きながらリズムが取りやすく、表現演技がしやすいテンポに近い曲が使用されていると思われる。

音楽の調に関しては、乳児期はヘ長調が７曲と最も多く、幼児では二長調が10曲と最も多かった。どちらも生活の歌や、季節の歌など園生活の中で歌われている歌で幼児が歌いやすい音域でよく用いられる調の曲が選曲されていた。

乳児、幼児、ともに子どもたちが好きな曲、耳馴染みのある曲を使用している回答が最も多かった。普段の保育現場で歌われている子どもたちが好きな曲を使用することで、普段の遊びで聞き知った曲で表現することが、子どもたちの自然な表現につながるのではないかと考えられる。日頃歌っている曲や、聞いたことがある曲を使い、日常の保育の中の遊びから身体表現へ、普段の保育の中で練習しやすい環境にあることで、身体表現を遊びのなかから運動会という特別な場というものを意識しつつも、子どもにとって楽しく取り組めるプログラムを組まれていることが考えられる。さらに幼児クラスでは、バルーンなど、保護者から見られることを意識したプログラムも行われていた。

（２）質問Ⅳ自由記述欄の分類

「運動会の開催にあたり大変だと感じること及び課題と思うこと２点」について、記入された自由記述を分類しその件数と主な内容を表16に示した。

表16　運動会の開催にあたり大変だと感じること及び課題と思うこと

| 記述内容 | 件数 | 内容 |
|---|---|---|
| 運営 | 22 | 自園での開催ではないため、運動用具を運んだり当日に会場を準備したりすること |
| | | たくさんの人が集まる中での、不審者等の安全管理 |
| | | 職員が少なく事前準備や当日の運営なども一人一人の役割が多く負担が大きい |
| 暑さ対策 | 32 | 暑さ対策のため、テントやミストの設置など環境作りや短時間で練習するための計画 |
| | | 暑さが厳しい時期が年々長くなってきていて、外での練習がなかなかできなかったり、熱中症にならないように配慮したりすること |
| | | 暑い日が続き、室内での練習がメインになり、園庭での練習は短時間や水分補給をするなど配慮しながら行っている |
| 準備 | 18 | 使用する運動器具などの運搬手配 |
| | | 当日の天候次第で準備や段取りが変わるため（雨天時体育館）直前まで持ち物や役割など決定できず当日バタバタする |
| | | 競技に必要な準備物の制作 |
| 練習 | 23 | 進級、入園したばかりだったので落ち着きがあまりなく、練習時間が短かった |
| | | 自分の園ではなく近くの小学校の運動場での開催だったのでリハーサルもなく、子どもたちはぶっつけ本番だった |
| | | 子どもたちの気持ちを高めて、当日まで盛り上げること |
| 内容 | 17 | 子どもの主体性を尊重できる競技や演目にするにはどうしたらいいのか |
| | | 楽しさプラス成長を見てもらえる場、両方兼ね備えた内容を考えること |
| | | 一人一人の特性に合わせた対応の仕方 |
| 保護者対応 | 14 | 保護者席の設け方や開場までの並び方など、ルールを守ってもらうよう周知し促すこと |
| | | 子ども達全員が保護者の満足のいくような成長を見せられるかという点 |
| | | 新しいことに取り組むうえでの保護者からの理解 |

最も記述が多かったのは、「暑さ対策」に関することであった。その背景であると考えられる気象変動などに関しては、後述（③）するが、暑さにより運動会の日程自体を考えていかなければならないこと、テントやミストなどを設置するなどの環境を整えること、そして子ども達と保育者の熱中症予防のために練習時間や場所を配慮しなければならないこと、といった多側面からの記述がされており、近年の暑さに関わる問題は乳幼児の運動会においても大きな課題となっていることが分かる。

他に件数が多かったのは、「練習」「運営」に関することであった。詳細は後述（④）するが、園児数・観覧人数に対応するため等の理由でより広い場所が必要となり自園以外での開催している園にとっては、「練習」「運営」において大変であるという記述が多く見られた。このような記述は「準備」や「内容」にも通ずるものがあり、分類してはいるがどの項目も相互関係があることが分かる。

また「内容」においては、子ども達の主体性を尊重、一人一人の特性に合わせた対応、といった記述があり、主体性を重んじ多様性に対応した運動会を目指す園がある一方、伝統やその園ならではの特色を重んじ、見せる機会として捉えている園もある。運動会が子ども達の成長を見てもらう場としてのねらいをもつものの、子どもたちの主体性を重んじる事との兼ね合いの中で、園種や年齢によって様々な取り組みを試行錯誤していることがうかがわれる。子ども達にとってよりよい運動会を考えていくための今後の課題として挙げられると考える。

（３）熱中症対策について

運動会を開催するにあたり、熱中症対策に苦慮しているという回答が多かった。昨今、全国各地

の園、学校等で運動会の練習や運動会当日に熱中症による緊急搬送などが相次いでいる。熱中症を引き起こす環境条件には、気温が高い、湿度が高い、日差しが強いなどの環境条件のほか、乳幼児や高齢者、暑さに慣れていないなどの体の条件、長時間の屋外作業などの行動の条件がある。これらの環境条件の中で、体から熱が放出されにくくなることで熱中症が発生しやすくなる。

本研究の調査協力園の所在地の中で最も多いN市の例をあげ、N市の気温に関する2011年と2024年の統計を表17に示した。園が運動会を実施している月は９月と10月に行われることが多い。2011年と2024年の最高気温や最低気温、猛暑日（35°以上）真夏日（30°以上）夏日（25°以上）を比較してみると、明らかに気温は上昇しているのが分かる。

表17　気象庁 N市の気温に関する統計より作成

| 2011年 | 最高気温 | | | 最低気温 | | | 猛暑日 | 真夏日 | 夏日 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最高 | 平均 | 最低 | 最高 | 平均 | 最低 | | | |
| 1月 | 9.6 | 7.5 | 4.0 | 0.4 | -1.7 | -4.2 | 0 | 0 | 0 |
| 2月 | 19.0 | 11.8 | 2.4 | 7.6 | -0.1 | -4.0 | 0 | 0 | 0 |
| 3月 | 21.7 | 12.6 | 6.7 | 7.5 | 0.9 | -2.7 | 0 | 0 | 0 |
| 4月 | 27.5 | 19.4 | 10.9 | 12.4 | 5.1 | -1.4 | 0 | 0 | 1 |
| 5月 | 29.7 | 23.8 | 16.5 | 18.8 | 13.0 | 8.5 | 0 | 0 | 12 |
| 6月 | 34.7 | 27.5 | 18.0 | 25.1 | 19.2 | 14.9 | 0 | 9 | 8 |
| 7月 | 35.5 | 31.5 | 25.3 | 25.5 | 22.6 | 20.0 | 1 | 23 | 7 |
| 8月 | 36.1 | 32.8 | 25.9 | 26.6 | 23.6 | 21.8 | 6 | 21 | 4 |
| 9月 | 33.6 | 28.6 | 22.0 | 24.5 | 19.2 | 11.2 | 0 | 12 | 10 |
| 10月 | 26.7 | 22.7 | 18.2 | 18.6 | 12.5 | 5.8 | 0 | 0 | 5 |
| 11月 | 25.0 | 17.7 | 12.8 | 17.3 | 8.4 | 1.5 | 0 | 0 | 1 |
| 12月 | 18.2 | 10.9 | 7.0 | 11.1 | 1.8 | -2.3 | 0 | 0 | 0 |
| 年間 | 36.1 | 20.6 | 2.4 | 26.6 | 10.4 | -4.2 | 7 | 65 | 48 |

| 2024年 | 最高気温 | | | 最低気温 | | | 猛暑日 | 真夏日 | 夏日 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最高 | 平均 | 最低 | 最高 | 平均 | 最低 | | | |
| 1月 | 14.1 | 10.3 | 4.9 | 8.1 | 1.5 | -2.1 | 0 | 0 | 0 |
| 2月 | 19.3 | 11.6 | 5.1 | 10.9 | 3.2 | -0.5 | 0 | 0 | 0 |
| 3月 | 24.1 | 13.4 | 7.6 | 12.1 | 3.8 | -1.3 | 0 | 0 | 0 |
| 4月 | 29.9 | 22.8 | 15.8 | 17.2 | 12.1 | 3.8 | 0 | 0 | 9 |
| 5月 | 30.0 | 24.8 | 17.3 | 18.4 | 13.2 | 6.1 | 0 | 1 | 17 |
| 6月 | 34.5 | 28.7 | 21.9 | 24.1 | 18.9 | 13.3 | 0 | 12 | 15 |
| 7月 | 37.2 | 33.7 | 26.6 | 27.0 | 25.1 | 21.5 | 15 | 11 | 5 |
| 8月 | 38.4 | 35.0 | 26.8 | 27.1 | 25.2 | 22.9 | 21 | 8 | 2 |
| 9月 | 35.9 | 32.8 | 26.8 | 26.9 | 23.5 | 18.8 | 11 | 11 | 8 |
| 10月 | 31.5 | 25.6 | 17.7 | 21.3 | 16.9 | 10.6 | 0 | 3 | 16 |
| 11月 | 25.1 | 18.5 | 11.8 | 16.7 | 9.5 | 5.4 | 0 | 0 | 1 |
| 12月 | 18.9 | 11.7 | 8.1 | 7.1 | 3.1 | -0.9 | 0 | 0 | 0 |
| 年間 | 38.4 | 22.4 | 4.9 | 27.1 | 13.0 | -2.1 | 47 | 46 | 73 |

表17が示す通り、９月10月の運動会シーズンであっても熱中症のリスクが高くなることがわかる。また、猛暑日や真夏日、夏日の日数の比較をすると、2011年の９月は猛暑日０日、真夏日12日、夏日10日。10月は、猛暑日０日、真夏日０日、夏日５日であったのに対して、2024年の９月は猛暑日11日、真夏日11日、夏日８日。10月は猛暑日０日、真夏日３日、夏日16日であった。特に2024年の９月においては、すべての日が夏日以上、10月も７割の日が夏日以上であった。

全国においても、2024年９月の平均気温は、10年前の７月８月の平均気温に相当している。特に猛暑日や真夏日が連日続いているため、運動会の９月開催は危険リスクが高いと考えられる。また、10月平均気温は10年前の９月の気温に相当しており、猛暑日や真夏日も少なくなってきている。

熱中症は、気温だけの条件ではなく、体温を調節する機能に大きく関わる「気温」「湿度」「輻射熱」が関係している、このような環境状況下の中において、運動会の練習や本番においては、次に示した３点（①～③）の熱中症対策を万全に講じながら行う必要がある。

① 暑さ指数（WBGT）を活用し、暑さ指数が警戒レベル等に達している場合は、内容や強度を変更したり、休憩時間をこまめに入れたりしながら練習などを行っていく必要がある。また、リズム室などの空調システムなどが完備されている部屋での練習や気温が低い時間帯での活動など時間や場所などを工夫していく必要がある。

② 時間帯を工夫する場合は、練習期間には運動できる服装での登園を実施したり、少し早めの登

園が出来るようにしたり等、保護者の理解と協力を得ることも必要となる。

③ 寝苦しい夜も多く、冷房を入れての就寝や、昼夜の気温差から体調を崩しやすい園児もいる。そのため、登園時の園児の体調チェックを正確にする必要がある。口頭だけの聞き取りでは漏れ落ちが出てくる可能性があるため、ICTの機器や保護者との連絡アプリなどを利用し、出欠や遅刻早退の確認や・体温・体調・食事の状況・排便等を入力してもらい、職員全員が情報を共有できるようにする。そのためにも保護者との連携や協力が不可欠であり、日ごろからスムーズなコミュニケーションを図る必要がある。

（4）運動会の運営

運動会を行う場所として、自園の園庭で行っている園や近くの小学校や中学校の運動場や自治体や行政が管理するグラウンドや体育館などを使用している園など多様であった。空調システムのある体育館等で開催する場合には、熱中症のリスクは軽減され、天気に左右されることが少ないため計画も立てやすいことが利点である。ただ、空調システムがある体育館等での開催であると、練習は各自園で行うが、本番は初めての会場となることがあり、園児の動揺や指導者等もなれない場所での開催に手間取ることも多くスムーズに運営できない懸念がある。また準備や後片付けも当日の限られた時間で行わなければならないことで負担があるとの回答があった。

体育館を利用することにおいては、費用面や場所の借りられる日にちに限りがあるため厳しい面もあるが、リハーサルなどを含め前日から借りられるようにしたり、準備や後片付け等の時間を考慮し、貸し出してもらえる時間を早めてもらったりするなどのシステムを行政や地域団体と交渉していく必要があると考えられる。自園独自の条件を見極めながら、実施場所を選択し、ねらいに見合った種目等を検討しながら、無理なく行えるようなプログラムの編成にしていく必要がある。

また、準備や後片付け、進行などにもスタッフを増やすことによって時間の短縮を図れると考えられる。今後、保護者、地域の方々だけでなく、保育養成校の学生ボランティアにも協力してもらいながら運動会をスムーズに運営できるようにしていくことも視野に入れながら行っていくことも可能ではないかと考えられる。

（5）質問Ⅴ「新型コロナウィルス感染症の制限期間以前と制限解除後の運動会の運営や開催に関して変化した点、工夫した点」の自由記述の分類

自由記述の回答から、コロナ期に様々な制限があったことで変化や工夫をした点を＜時期・場所＞＜運営、プログラム＞＜観覧＞＜競技・演目＞に分類して以下の表18に示した。

表18　コロナ期に様々な制限があったことで変化や工夫をした点

| | |
|---|---|
| 時期・場所 | 9月開催だったが練習時間が外では暑くなかなか練習できなかったので、7月に開催したことで練習時間も確保できた。 |
| | 時期についてはコロナ禍関係なく、暑さがましになる10月下旬に変更した。 |
| | コロナを機に場所を天候関係なく体育館で行うことに決めた。 |
| | 暑さの問題もあり、5月に行い午前中で終われるように変化していった。 |
| | コロナ前は乳児クラスも広いグランドを使っていたが、コロナ渦より乳児クラスの運動会は自園の園庭で行っている。 |
| 運営プログラム | コロナの時は幼児と乳児で運動会の日をわけた。制限解除後は乳児は2歳児のみ運動会に参加する形になった。 |
| | 親子競技をしていたが、今年は子ども主体の種目で行ったので親子競技ではなく親子ふれあい体操に変更した。 |
| | 全学年通しではなく学年ごとの発表会にしている。解除後もそのままの運営にしている。 |
| | 規模を縮小、時短、二部制にしたりしたが昨年度に戻した。以前の形が当園らしいと考え元通りにし今後も行っていこうと考えている。 |
| | コロナ禍前は1-5歳児で開催していたが、クラスごとの運動遊び参観（園のホールで開催）を経て現在は3-5歳児での開催に変わった。 |
| 観覧 | 立ち見という体制に変えたため、早朝からの場所取りもなくなり、子どもの演技を多少移動しながらでも見てもらえるようになった。 |
| | クラスごとに時間帯を分け人数制限があった。現在は同時に行い人数制限も設けていない。 |
| | コロナ禍をきっかけに子ども1人につき2名までの来場とした。 |
| | 保護者席を自由席から指定席に、学年ごとの入れ替え制にした。 |
| 競技・演目 | 1クラス2種目ほどに変更、コロナ後もそのまま継続。 |
| | 親子、保護者、来賓の方々の競技をなくすことで、子どもたちのみにスポットを当てることに徹底した。 |
| | 卒園児競技や来賓競技など園外の人と接触のあるプログラムが見直された。 |
| | 練習をつみかさねて行うものでなく、日頃から行っているものを取り入れる。 |
| | 親子、卒園児、未就園児の競技をなくし、在園児のみになった。 |

これらの結果から、コロナ期に変化、工夫した内容が制限解除後も変化し工夫した形態で開催していることが分かる。コロナ期においては、各園様々な工夫、配慮をした運動会を行っており、コロナ期にやむを得ず取りやめたり、縮小したりをせざるを得なかった競技や演目もあった（岡澤,2023）。しかしこのことがきっかけとなり最低限の種目であっても工夫によって満足感を得られることもあると分かった。そのため、制限解除後、近年の気候の状態による暑さとも相まってコンパクトではあるものの､子ども達の様々な達成感はもちろんのこと､保護者はじめ観に来られた方々にも満足感が感じられるような形へと変化しているのではないかと思われる。

制限があったからこそどうしても見てもらいたい、伝えたいという競技や演目を考慮した結果、絞られたプログラムでの運動会であっても子ども達の成長を感じられる機会となり、保護者からも評価を得ることができたのではないかと思われる。それをふまえて、コロナ後に新しい形態の運動会として開催している。一方、園独自のスタイルや園ならではの競技や種目に対して、その園らしさにこだわりコロナ期前の形へと戻しているといった回答もあり、運動会は大きな行事であるがゆえに園の運営、特色等に関わるため多様になっていることもうかがえる。

すなわち、感染症対策として行われた運動会の変化や工夫が、現在の幼児教育・保育の変容、保護者のニーズや考え方といった多側面とマッチしていく部分を発見していくことで新しい時代の運動会の課題が挙げられていくのではないだろうか。

### 7）観察記録

本学院の付属幼稚園、および同法人系列保育園、こども園の運動会の本番や、事前の練習や事後の全体の園児たちの様子を数週間観察すると、いろいろな変化や成長を感じられる場面があった。

系列のこども園において夏休みあけの９月から運動会にむけて過ごす子ども達の姿を観察した。普段の保育の中で運動会に使用すると見通した楽曲が流れる中、子ども達は保育者と体を動かしたり、一緒にリズムを取ったりして過ごしていた。しかし子ども達の中には、そのような雰囲気にな

じめなかったり、自分の思ったままの活動を続けていたり、うまくまとまることが出来ない状況もあった。また太鼓の音に驚き顔をこわばらせる子どもや振り付けを覚えられず泣き出して練習に参加できない子どももいる状況も見られていた。そのような中ではあるが、子ども同士のつながりや保育者の関わりから少しずつ運動会へ期待を持ち、楽しみにして向かっていく姿を見ることができた。

運動会を終え、直後の週明けから子ども達全員が運動会の続きを行っている様子を観察した。５歳児が行なっていたリレー競技を３歳児や４歳児の園児たちが見様見真似で行い、みんなが楽しく遊んでいる様子が見られたり、各クラスのダンスを３，４，５歳児の子どもたちが一緒に踊ったりするなど、異年齢の交流が自然と行えるようになってきていた。特に５歳児においては、その中心となって、年下の子どもたちにいろいろなことを優しく教え、いろいろな物を譲ってあげる場面も多くみられるようになった。

また、３歳児の園児が友だちの集団遊びに入れず、寂しく遊んでいる姿を５歳児の園児が見つけ、数人で声をかけ話しを聞き、みんなの輪に入りたいことを聞き、みんなのところに連れて行くなど、園児同士で問題を解決する力などもついてきたように感じられた。最年長としての自覚や自信、仲間意識等の力や感覚が備わってきたと考えられる。３歳児では、移動する際に一緒に行こうと声をかけ手を繋いで行く園児が増え、個別遊びしかしていなかった子どもたちも集団遊びをするようになった。

## ４．まとめ

本研究は、乳幼児期における新しい時代の運動会に向けた今後の課題を見出だすことを目的として行われた。

N県及びK府O府の公私立の幼稚園・保育園・認定こども園26園を対象とした郵送による調査における、20園82名の有効回答から運動会の達成度の統計的分析と全回答の自由記述の分析、および同法人系列の運動会前後の観察を行った。その結果、乳幼児期における新しい時代の運動会に向けた今後の課題について次のようなことが明らかになった。

１）運動会では、領域「健康」のねらいが最も高い達成度を示した。本研究では、意欲・達成感・楽しさ・自信等の非認知能力と運動との関係を表す達成感を質問項目とした。保育現場では、運動会という行事を運動能力だけではない総合的な価値を認識していることが明らかとなった。このことは今後も忘れてはならないものであると思われる。

２）子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性よりも、保護者が子どもの成長を見る機会になったという達成度が高かった。また、領域「表現」の達成度が、「人間関係」「環境」「言葉」の達成度よりも高かった。それは運動会の身体表現プログラムが園児も保護者も成長を感じられる機会としてとらえられていたからであろう。このことから、運動会において成長を感じられることは望ましい経験であるが、子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性に関する経験もできるようなプロセスを工夫することが課題であると思われる。

３）乳児に関しては、運動会における明確な課題が読み取れなかった。本研究の設問が不十分であったと考えられる。しかしながら、身体表現プログラムにおいては音楽面で乳児の特徴を捉えな

がら実施している様子が自由記述から明らかになっており、今後は乳児の身体表現能力の捉え方を柔軟にして実施していくことが望まれる。

4）近年の気象状況からみて、熱中症対策を万全に講じながら行う必要があることが明確である。また、気象状況をマイナスに捉えず、保護者や地域の協力を求め、社会資源やボランティア等に頼ることも、練習や運営上の困難の解消になる方法だと思われる。

5）感染症対策を講じた運動会における変化や工夫をふまえて得た本来の運動会の在り方を意識化することが必要である。そのことと、現在の幼児教育･保育の変容、保護者のニーズや考え方、運動会で何を子どもに経験させたいか学ばせたいかという園の目標などの多側面とがマッチしていく部分を発見していくことが新しい運動会に向けて望まれる。

**謝辞**

調査にご協力いただきました園所の保育者の皆様に、心より感謝申し上げます。また、帝塚山大学教授清水益治氏、帝塚山大学名誉教授岡澤哲子氏におきましては、本研究を進めるにあたって貴重なご助言をいただきました。心よりお礼申し上げます。

## 引用文献

国際連合広報センター（2023,7,27）記者会見による国連事務総長発言
https://www.unic.or.jp/news_press/messages_speeches/sg/49287/
（参照2025,1,23）

柴崎正行（1992,1993）なぜ幼稚園で運動会をするのか．幼児の教育92（10）.10-18.

## 参考文献

気象庁（2024）気候変動監視レポート2023

箕和潤子（2017）戦前幼稚園における運動会の教育的意義に関する一考察.武蔵野教育學論集.33-9.

岡澤哲子（2023）コロナ禍における幼稚園・保育所の運動会の実態について.帝塚山大学子育て支援センター紀要.第４号.

柴崎正行（1992,1993）なぜ幼稚園で運動会をするのか．幼児の教育.92（10）.10-18.

2025年 3 月31日　発行

**奈良保育学院研究紀要　第 22 号**

編集兼発行　奈良保育学院
〒630-8121　奈良市三条宮前町 3 番 6 号
Tel（0742）33-3622
http://www.shirafuji.ac.jp/gakuin

印　刷　所　共同精版印刷株式会社
〒630-8013　奈良市三条大路 2 丁目 2 番 6 号

**BULLETIN**
**OF**
**NARA TEACHERS COLLEGE OF EARLY CHILDHOOD EDUCATION**
Volume22

**CONTENTS**

Basic Childcare Seminars and Specialized Childcare Seminars enabling learners to Acquire Practical Skills
~ How to improve cooperation with affiliated Kindergartens ~ Keiko MASUI & Sayuri SAKAMOTO

Study of the Diet question statement about "basic lifestyle" on domain "human relations" Yoshimune IMAI

Future Challenges for Early Childhood Sports Days in a New Era
- Analyzing about Current Situation of Sports Days in N.-City etc -
Nobuhiro SUGIMOTO, Mutsumi MORI & Yasuko YAMAMURA

２０２４